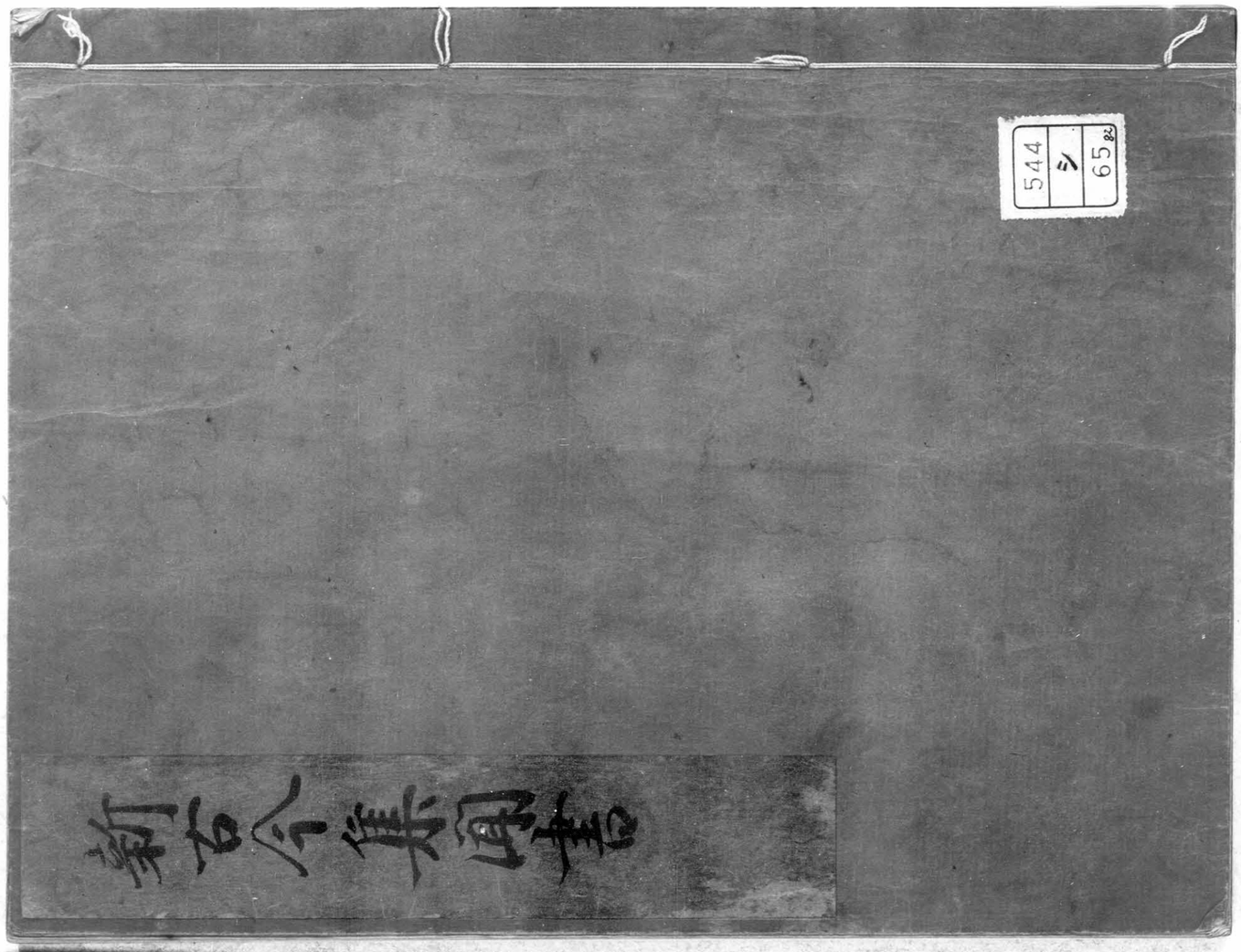

新古今集聞書

544
シ
65 82

新古今集聞書

春哥上

春たつ心をよみ侍ける　摂政（太政）大臣

みよしのは山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり

云節ハ山深き所まてかすめハ春も来てみへしさ

まさに天の言として四時行ところかみなれハ大とくろ

深雪の内よりし春の気ハ見ゆるもの之長きく摂也

御之春以の哥るれしも一上乃姿ろうへ　深山深雪

のとまてみえてうる所まれんありうて此哥ハ

ゆくとき春の光ハはるゝよまて見よみゆ山ハ嶋

又ふりにし里とかくるハ吉野ハ旧里なれハふるれく

云ふとうき　此哥ハ

見よしのゝ山の白雪つもるらし（古今達ふりにし里をふるさとハ）ふるさとさむくなりまさるなり

日の光やうつりけりいつみうさふりにし里に花も咲

なり

544
シ
65

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭24.7.13
184064

式子内親王

山ふかミ春ともしらぬ松の戸にたえ／＼かゝる雪の玉水

神妙乃御哥也字特之句ことに心ありて餘多
雨ありしころし哥の風情さしくはへられたれハ女乃
哥なれハとりわけ心あはれし山ふかくとらへとり
ハ春ニ庵松門るとといふとも春く雪のふり侍を
かくてはとも志らぬさましけ寸ゝ見れ志らくけれ
とてたえ／＼かゝるとおそれど見ゆるよ也
松の戸とおそろしからぬ御上のおもひとを
ことす思ひなかれとも志ての深山幽谷にこもる
さらんをおもふらせしむ春ともしらぬ松とつけ
られたる（松ハ）ことさらの神し妙なる秋也としそ志らぬよ

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の芦の若葉をこゆる白波

此五文字春乃月のおほろなるをいふ夕ハ月の光も
さやかならぬを夕月夜とハ山なとおかくれし塩満
くらしハ海に塩みちて余さりたる事なるらし雪
やう／＼寸るゆへ月もし難波とも芦のみちくる
をハ又塩みちきたるしと云之寸らにて見知し
こゝかしこおもひしかハ白波よ心ありて月し
みすみ芦の若葉にえて寫景情を詠る寸雪
波よいひなしたるとえんふり月し寫と感ある
哥也

久かたの月のかつらも秋ハ猶もミちすれハやてりまさるらん

西行法師

ふりつミし高根のミ雪とけにけり清滝川の水の白波

此哥ハ高根乃ミ雪とけにけりと云て先第一句ある
しらするに此下に清瀧川とハいへるはるへし

爾ありてはよきと云て中将しかり又よかきと
扨さて仙家しあへし今しれ心つは前家之言葉
乃ころ霞ハ俳よ詞之をよろて又ゆけなりとき
よくおもれさり清濁をことて出して結句とその
白波といふて男作也こと也ハ春の霞なりて霞の消る時
かはりなり清めしにろうあら之清濁乃そのまゝりて
なりゆくとて其さは雅なる跡の霞し汀の波とけ
ゆふとたとり古まろ心之眼前の趣之
櫻谷乃みよし櫻乃霞とさして
はすとして鳴滝御製よ
ひとまのは春の夕ハすこしになりきてていくらか名の白雲

太上天皇

見わたせハ山もとかすむ（スイキヤウニハルヲソム）水無瀬川夕ハ秋となにおもひけん
是ハ新古今卿春霞といふ引出る今風ハ白霞也

古人秋の夕ハうき時といひ殊更覚ゆ春の夕を
ろくとうすくてうこくとなく地こそ色る風
山のあはれを世すくひあはれよし趣くしられ
秋の夕をうしといひたん春の夕こそ猶まさりけると
いはしからは情あるまゝ風情限りなし又小す霞乃
離乃花めぬしめり秋ハ夕とされ云の夕ん
是ハ秋の夕とおもはれる時と云る此の宇趣こそ
打おもはれよ侍きとおもふ春の夕こそ面白くおもはれと
云詞んおもふ侍り

藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とたえして嶺よ別るゝよこ雲の空
此五文字高き之文字也春の夜の夢ハ短くはかなき
春の夜の夢ハ短くはかなきものにて覚めて残る横雲
まのなりあはれつゆとひいありて余情限りなき

云也菱の浮線綾とゝしてとふハ菱のさゝめくらうる也云
乃影れ時行時ハ菱し浪すてさそし名あるとき
物ゝるとなすゝやうに家の横雲乃浮心ゝす別ゆく
赤ゝとゝふんゝとこめて横雲乃毛とゝえすてゝ過う
云也ハ菱の浮線綾にゆかり

皇太后宮大夫**俊成卿女**

梅の花あかぬ色香もむかしにておなしかたみの春の夜の月

此哥　色ありし色香にそれとおなし比堂上淡仕ふる梅
此色香ハたゝ名あるを梅よ人とゝおも人とも月に同する（梅そし）
るゝもいろ色し昔乃春ともしのひ人をたゝ思し月
し梅と昔のかたみハかり抱とゝ云云也月やかハらぬ春
やむかしの云云との心ありてり

本歌　内親王
なかめても昔はなりぬるもあかぬの梅ハ見れはそ忘れ（ヨトモ）

此哥さしかハりし後の春と心ろ色ある心とつけてみえ
御哥特出る所ハ法花乃中よし梅ハ白と感して名
とし取れし御前古人と名くよ御天ししなり
滋藤雨カ詩ニ梅歴二寒苦一発二清香一（何方可化身千億一樹梅花一放翁又杜子美詩云）ことゝ申さ
くよくてり此梅乃色ゝさ名色となりぬめ人く我
影なる君子んめかゝりよ我しるすくめくなるあ
つゝきぬハ昔よめさりとも忘ゝるゝ人をまもりて思と
ひるゆかりやすよわくなされたる又深成よる本乃
在ハ我と忘れぬと伴りせとり宗て読み入ての心は
風情ありて思ひくそ作者

寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわひぬおぼろ月夜のあけぼのの空
たのむとハたのもしかる相通也田面とよりて雁とハいと
云雁ハ春ハ北へかへらんとするにさしてしまふの曙に

名残の月さよに露と月の名残なる何ゝゆへ也と此
所の名残し一入殊なりきやうしゆゑあきらし心あるき
所し名残とおもひもとめて所のもの字我と
お思ふ心の感情ふかくあはれさ限りなきことや

指南（大政大臣）

人々ある時ハ思ありし時も月と花と此名残そそ気
いまハとも詞あり也閑なる時と云いまハの心あるとも
きんなき月と花とハ名残そとも云ひて詞言語ハ
此乃たる世の夜寝の月と花ともを見すて行事
ふ西行といふ人と居る全に教訓し了られた
也　春霞たつを見すてゝ行雁ハ花なき里に住やみ
やならへる由居の方し申たりされはいはれ也

定家

うすく元いの花へなるところの若草に詫すてみゆる雪の村きえ

此方表裏あり表ハ雪乃まく消ニ至て消もらく
まふ若草也　是迄ありてのし此裏ハ心ハ四季を
感ところに春ハ花夏ハ何る秋ハ紅葉冬ハ雪有と
面白物ハあれともみて我々の乃きめつらしく（[illegible]）
思ふ心ありて村きえる雪にふれぬるよ若菜の若草を詠せし
見とりなる花のつまとゝ春乃見へし秋ハいろくの花にまさりたる

在原有家朝臣

梅自然よくて山桜ゆへ花つれなくきえぬ雪とこそ
白梅よ花の咲るうちハ全体雪也独此雪ヶ枝
此自然ニ消へことに梅しくるゝやみこれハ花
されとも花を見る迄を梅自然之冬の二への月さりハ
とるまていらぬ時にてつもる消ぬ雪とも思ふなり
梅自然よつてハまつやさるゝところは色みえと
なりてはあらぬ由也

終日見て山をてる月乃かくるゝまで山にありて不断ありあまりて九十日の春しくらしあり屏風に山に桜さきたる所を

太上天皇

桜さくとを山とりのしたりをのなか〳〵し日もあかぬ色哉

花しさくころなりし遠山又家の間より見ゆるをかしと感情ありけるとぞ此哥ハ俊成に九十の賀行ひけり時の奉る也俊成卿乃齢のうつりあり見しめ給ふ也此御製又俊成乃御師範より祝ひ此よふも延へけるなし桜さく遠山鳥の尾乃といひ出されしよりなか〳〵し日とあかぬ色と侍るハゆゝしくて心又ことに深きの切也是君乃山とりのしたりをのなか〳〵しきと祝ひとゝのへるよろこびよりことさらに強く勢ひあるの故也

俊成卿

又やみんかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春の明ほの

かたのゝ御野ハ日次乃御贄の御地也又桜も有所なれ侍と云縁ありて桜かりといひて花の雪ちると云ひ詠ら曙ハ幽玄の地にて侍るとかく面白さと命の哉まハ又我ひとつもとより心もあまりてよろしきよふ有又やみんハ又やこりんとおもふ事のよし哉をとりとみえことさらにとゝけらる誠に風情有よし云ふ事也

能因法師

山里の春乃夕くれきてみれハ入あひの鐘に花そ散ける

此哥風の花をさそふ時もなく入相の鐘に花の散らむハさきこゝろをさはりとも哥とも花の時のさそ思ひよれ山里をもとむも花をゆかりよ春しれぬ花をちりての後とも思ふ人の無のゆへの哥とハ

まうけて万春の比人にて一向に捨し山里をまてゝらる
に念ろの好しわわれぬる都をし花さし数ふてる
名所しるすさ物みさそいさとへんと云心ありておれ
やうさうさ之は捨世の方よ
たゝくとて花の事戸人とあけられハ人を指のくあるす（つとゝう）
はさすと切すよとれる心ありつ

西行法師

なりとも花をしいてゝまれ道いらう分てそらうちれ
捨る身捨せよし花をしゆりてみるまそれ風ん
すく枕とし〔て〕られさされし名所おもしと思ふんふ
うし花の上こそしいとゆうさすと花心者のくとよ
めつらうさ花よしのとの字眼とあけてらん人し會（コシカウ）
健も廬去所住而生其心の心也意なと

藤原定家 朝臣

梅が花庭の春も沈と思ひとはそそ人の雪とまたそらん
み文字あらうつく切るる句也雪のこと数けすゑる
庭の花も又風も沈まく麻侍り雪とみすうれと
わかもそ又にいて雪ととすん侍しめと世の句よ問答
まえりうす也切すハ
影ふてすハ何とハ雪ともそやりるを沢とハまとをし花と（こゝろ）や

藤原家隆朝臣

ちるし花落ちう別ゝう出てし雪れさそてつまるさき嵐の春風
此方乃し花の何ハ雪とし花とこゝろて見くよ
らわくうしやされもとされとも此のあるまやてんちりなそ
たる事あつとに萬ととらつとを不分分けのこゑ
明わうくこころうたる春風ハりつまあく旅つとお
よとそうこれ世乃の方ありともかすまするあいとそやく
るいとるるそれハ久しく出てまる心ともこめて（よまれ侍り）

飛花落葉のとらへも詩人歌人はゆめよしなきを
わけて世間と観ずべきにもあらず切なるは
風情の気よかれ白雲のさそひてつまるや見る（人の心ばかり）
あはれてつきさとは降すべきかな
寂蓮法師

思ひたつ鳥はふる巣もたのむらんなれぬる花の跡の夕くれ
春のよろづの花は盛なる時ハなつかしともおもひまつりつゝ
ゆき具をそらかへし花もちりてなるの夜しまれ
あまり夕暮の千清に独すみすみてなるハ今
かありとはなのとてや御人我は此花のなけより即
よなの年もなるしそれはせんとあはれより我ふ
くらされよ此春のすよ深あはれ残って
よまれしを仏其心古語云花散在根鳥帰旧巣
といへり
同

くれて行春のみなとはしらねども霞におつる宇治の柴舟
春のくるゝハ春のみなとのゆくゑの春湊を
まる所なへしされどもいづくともしらねし霞のみなとなる
いとも此宇治川の勝ことにすぐれし夕霞にくれ
紫に霞みわたる面白しき春のなごりあかずかな
かくとまがふさしもなき宇治の春の湊の宇治の
かくのさきさゝ宇治湊とらものなれるなると云宇治湊の
字あはれなるとにらしく哉ある
見るよみ詠てなるかる宇治川にたゞや柴舟に帰りなん
藤原雅経

ちわまでし花ゆへのまれつゝ是しくれつゝふ山へのさと
はる日あらへてちとせのりあるよふへの世とさ
めぐりにそうかしたら哉より秀逸なりなどと申し
まかれよ他ともかさひよ入侍して初心き也

能く分別すへしたとへは深山幽谷といふ題ならは
まれにも見ぬ処もいへる花の句にハ思ハぬ方（たゞ日のうちに見る趣ハ花をおもひやりてもと）
とし□の題めくへしとなる句にも花ちり春も
むなしく暮行すかたをいひてこそさんさんあはれ
かく感情餘情極るところ也

摂政（太政大臣）

あすよりハ志かの花そのまれにたに誰かハとハん春のふるさと
花園ハ志賀にあるよしいへり花園ハふるく
ものあはれおもひを示すといふへきや志賀ハ旧都なれハ
花さかりにもまして見るへし花の時ハあはれそこら故つまれと
と自然にそこへ行てみしハ花もちりて春さへ立れ
たてハまれ乃訪しもまれましきと也世間にハ若
つきもまれなとゝいふもこそハ思ふきみの故なくと
いふ事も多かる事也此作その時分によく思ふ此乃
絶妙不思議なり古語云主人（以）客来花（十九寸ハ）行（モ）有
和気といへり

夏部

読人不知

をのゝ里につゝやさ月やミ神なる山に山かくれきん
読む時ハ事あまたもしるかハ何なると云るまて
るし又月やミのわかれたる於時なるか
てとりなりと領解しるへき事也
私云雉ニモ集ニよめり
春ノ野ニアサルキヽスノ妻恋ニヲノカ有カヲ人ニシレツヽ

俊成卿

昔おもふ草の庵のよるの雨になみたなそへそ山ほとゝきす
我故よ何の時ハ草庵ありといへる事あらハ浅思
ひよ世を乃かれて此草庵に住てよるすゝる雨
乃音をきゝにも心も一入すゝゆかりて感情多し
と涙なりて其草庵るとよあらんといふまてなき

しまふし思ふれる一付る所なとさけハさるす
こゝまめせんこしちすし魚と申ゑそなくさむれ見ゆは
渡るを人々とくよ也をいふとしよ付るまことり
さり方也言語乃所也或詩蘭省花時錦
帳下廬山雨夜草庵中又憶在錦城歌吹海
七年夜雨不曽知又巣庚前十年夏又一時
飛雨到心頭又辛老心閑去亦夏麻衣草
堂亦容身古人ハ何まて夜雨を面白かるよ給り
民部つ　艶光つ
付ところと一こゑけおりいまよ老をみあり此よはのむりいゑ
郭公よあられんとしてつ所也何のたより感ハあれわ
るり付るし老ていくよ老あくろへるんと我身乃上
よつわそといひて老所の杜とい老ていひんたる也
杜鵑乃声とい爲ハ付い寝覚のうきとする
も老てきやもしよ今ハいハ德しかこと付乃ゑへてう寐覚
うらてうとふふ方也何臭し声よるまハゑへてさ也
郭公ハ蜀の望帝化しら故よ不如皈と鳴也
御尤付なし声を思ひ出しゑてはへし我し
声とゑて我るまてし同友と思ひてゑくひて鳴
ところ方也わつれわさしれ

家隆　ーー

いろさん名もわきそれ郭公俳くてと思へて村雨の花
いろせんとも切るり刻也付る乃つまるさ猶みまへて
とい郭へしもさ思ひてそくよは也刻也郭公そ恨
て只顔とまつしよひ思ひてし村雨升そさら夕
乃雨ま成ゑ成きそも也やきさ方也切方
郭公そこれおちわきにぬめ出て成ると思へきさ給よ修さぬら

西行　ーー

明るから霞より出るに（かゝり）和歌山見すれは落くれ
和山とちらさらし深山より出るかゆへに是さへし山
乃麓に中やとをしてゐるとかくありとかいふて
ゆりかゝる心也源氏に松の柱竹の垣に心ありゐたる（さゝ）
まゐりめとくるしと申ゆりかゝる事也但今すみ（より）そ
心ちらへし和山といふ名をまとい源氏に（とより）
まれ人とをけるに近くなりてかの人とかゝる山家まて
曙と云語まて
和山にてに秋あはれみし春のそら立つきめての（明けハ）
とよみたしとまさ山のるゝる事そ絢ある事也

伊勢大輔

いにしへの田舎のそれり寸もしたるゆへ今日見えたる比の月日
田舎とは只賤のかる田舎とかゝる所にいとゝよりきし（句）
出るあるとたのましくるさまとすかといふ人もあるや
比乃日月とひとつてとうまゝかの日月は時に添
まさかりけるつき添ゆ源氏は
袖かゝる返添とかけの知るをりしいゆくとかの田舎も花のさ（紀）
いうさと見わすい早苗とおいをくし
又苗とれる朝田の面を見ておくとなくかの田あ（ぬ）

宰董（小笠之）

うらひみたとをさし寺なれかれや山とかるゝとゆくかもあ
こゝ衣ははをれたさうちゝと云也衛ハ心とあさらね（紀）
なとハ挿そこゝとさ寺あし御し和し自ゆるゝさ（ぞ）
こゝりまゐりてもとかゝとゝて源すさそれく
らやくるゝ母ゝる気しとするゝ物し當精るゝ
見るもゝ也詩多毛に作とらつゝ心のよしかゝ
とひ出せる気也此花て心よりけ人ハ行住坐臥
ねかはよもし心をすゝてその気味を見定して

[illegible]とそ

春宮権大夫公継

窓ちかきいさゝむら竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢

[illegible]より涼しさすゝ夏の夜の[illegible]は

涼しく[illegible]とのこと秋におとろくとい

窓ちかき[illegible]ともなく風よさめら

夏ハ只秋をまちとて[illegible]思ひける

[illegible]なり

[illegible]

[illegible]涼しき[illegible]風[illegible]

[illegible]竹の葉白く月さえて[illegible]

[illegible]しさハ秋やくるとて[illegible]下風

西行法師

道のへに清水流るゝ柳かけしはしとてこそ立とまりつれ

[illegible]名所を行よ柳乃陰よ清水の流

[illegible]此句を立とまりつれ

也　此字此句ハ眼也　此柳陰よ[illegible]清涼の心を[illegible]

[illegible]立よりて涼しさる心を[illegible]

ていつ[illegible]とし忘れて時刻をうつしたりとい

へるよりて[illegible]

よ[illegible]日をくらしさんとおもへは[illegible]

[illegible]

いふ頃の趣也

立とまり[illegible]

立[illegible]

[illegible]

摂政太政大臣

秋ちかきけしきの森になく蝉の涙の露や下葉そむらん

秋ハ物ことにへんするゆへに蝉ハ夏の物なれと秋もなく
しける物也夏の蝉ハわつかにしけきさかりの蝉の一声も秋
にかよひて物かなしくきこゆるとかやそれ故に哥にも
蝉の声やみなし秋の□んハ蝉の声をしのふる時分なりといへる
その後よりて深き人ともなくをしからぬといふ事又夏の末ハ大概
の名所也秋をきくもしきいひちんなからまたあきとに
たらしきうへに哥にもよまれたれはらはら
（千載）秋のくれきてきぬ萩の下風にそよくわかけゆへにおもひ
待宵や小院堀河家也

秋山　瓜遺有きこえ

いまときくやまにはまとはてもけにかくる山おろしの風
此方秋の初めに山おろし此風をもよふなりけり
ハ秋なりとよありあす中といふもせまる也
此葉の田よ付こくゆるかしけり山おろしみなし秋
みなかよりつくりてゆくゆへにけしき風に染ハあらしみなね
ともなくもしとあらたにさやうに有也此方ハ秋にね
やとめいてさやうにみおもの風のそよにうつくしもうとめく
よりは夜涼の時と松風よりおけるの外ハはつかしなし

古説し

はるされとりんと思ひうつる夜をいふ月夜りに秋を本とする
名所にて中よし花の面白さいふもありて花葉の面白かり
しありも或ハ月或ハ雪なると出て水よりて昔より
のそくやしきうる也況や秋の初ハうらくし涼しくまた
の夏とのよりし又ハ雨の景色をもつてをふおもひ
二又虫田秋ハさをたわらんと思ひやりさる事なくてきさ也
はつされとりんと思ひふりよりて初秋なるなれとこそ
仍してはとこの也清流彷彿とする也
去ことは前とははや物の虫の生田乃せり乃秋の初也

秋風とうちいて此句の趣也秋のさひしさと乱して
はつ秋のいく日の我も着る人秋風ふきて涼しきやと
と也いよいよ又露[illegible]
つれなさにいく日ありしの何をとか逢せて秋や来れかし
法橋顕昭

あくさめの空のくもと兼しめつきてけさうしろの秋の初也
萬ハ餘の苗よりしてやく成熟する地と本すれハ
手にや取らハ秋の[illegible]ふ寺し秋ならの本へをとろかは
うしろのしるへ心あるのしきとそ也表裏の二字と云紅
（此文ニ私云此人モ作ラコラトカ又浮ノウラカむとケニ声ノきコエル頭語）
何表の字をおりてとよのし裏の字とうしとよむへし念思
おりそいみしぬ秘[illegible]よ云人へし渡とうしこれらん
つらし同し也葦乃景苗より葛をよそ経之文
あくさの景は雨さらの苗家のかりにやとさしらん
西行法師

何はれいかに草葉の露のこほるらん秋風たちぬ宮きのゝ原
此句は秋と云ハ裏と云方にし又おもひ出ると云方にもあり
この草葉の露とみるハ二つの草葉の露みる也
主殿頭の秋の露ほとこそたうとて此面白き露
又われよみけるは表つはの草の露をさそとて
ありとは涙の心しおもへし又の泣は下の葉の露の涙も哀
若のわれ庭をよ對して秋風とやまて此谷
主殿頭の秋と思ひやりてわれハ草葉の露乃
こゝろなんとふへり何とは秋の風や感しなるへ也
作意は事裁ある事也西行法師の何かて下さ
かみとはいひまへし主殿頭ハ作意と思ふ北
同の名所也
大納言経信
花ことに人やまちわふ山里のいはねこそたれ年のつかの

此哥後撰集よ侍る何よあるこの此彼岸よ侍る
に秋の野乃面白くあはれなるをとれ秋の意しことを
よくこめて詞よおもしろく有ありて音我と此比その
哥は無音人かしよ出る所を合て詞てさいはく
とよめる之人こそ見えねとは耳本哥よ
人こそ見えたるなれに大殺いつきうしてみていさくら
宿の限りおもしろき所とは後撰集とさいとあるか
くしなくよあり出哥よ
来むるとさりとてみえねよくしく侍らぬ宿とあるは
侍らねよく乃んとのこ歌ついで心くしよ宿とあるは

人丸

さりとては人の野の萩もつとなけれしいりくる秋よ見え
此秋の野は見えぬくまてみれ合てとのことふしおもし
かきとりてうすやいたれしかさなる秋の野は面白さよ

同し哥よしなく思ふ人とりのこゝもまなんやいつ
ある侍りんとる枕よせんとまの枕をとまなん
来まえわると只へてそなすくなき此の心をうしと
ある哥なりてんかうるへし
いつしか秋さいかつらの
（萩名）あかめさくまつ古き名若林下やつうらん思ひそ（吾妹名）

慈円

多よあるおりの言萩のうへふみて此ふ秋の夕暮見
ゆふ方の秋の萩は音はてゝるとき物わすれしと
しらす思ひ定めしよ此にすれとさいて
夕れるはさいふ萩の為よりけりて見んとうす
とふ言萩と乱よりて歌伊へるよ
今らんと其つし秋の夕暮は萩のうへをふて人なるみる
又後拾遺下哥よ

秋風のやゝはださむく吹なへに荻の上葉の音そかなしき

あはれなる秋の夕に成行に随て荻の音しきり

と也本哥いつとても秋の心ハ荻の音よりしれ

夕ハいかにしてこそことにかなしからん

摂政（太政大臣）

荻の葉にふけはあらしの秋なるをまちけるよはのさをしかの声

るへし此哥ハ秋風と荻の葉のそよきけん物かなしくあはれを思ひ

此荻の音よりあはれなる物ハすくなからぬものなりしに

ゆへあはしときこえけれは鹿の鳴音をきゝけし

るへしくさしもあるへし物思ひつけられやうにおとろ

かさぬしくそ秋ハよそにつくありし荻の音

ありとしるよとあはれなりし也言葉のつゝき

也されハ定家卿も此哥の詞はかなしと申さ

あやとかまへしやうにむかしのやうに

やさしくきこゆるやさしきよりハいよいよ上手の

したゝかなるよりは秀逸と申ぬ付ぬ物と縁

して何にもつくさぬ也

同

物おもはでかゝる露やは袖にをくなかめてけりな秋の夕暮

秋の夕となかめやるまゝにそれとしもなけれとかなしさ

あはれとも袖にこれし露のあまりの涙也我ハ秋の夕と

なりゆくも思ひハとゝ夕の風感よりまてあはれを袖の

露かゝると不審して我ハなかめてけり我ハなかめ

と思ひはからぬと也なれしたる言葉作者ハかくこそ

風情ありてよしありかさく言語不思議のあるよし

（鴫ハ秋ノ鳥之）

西行法師

心なき身にもあはれハしられけり鴫たつ沢の秋の夕暮

心なき身とハ世上をのかれて出家をすてゝ心なき也

よ如何是ハ云すことも面白とも云ましきれ思ハ寸也
きまも秋の夕とゑ紀よ及ぬ道理深田の鴫の哥ら
ら夕暮れかゝれハ人の紀あよし骨髄よ上としたる
かくてるまゝ手伺よしいふれとよろすそとひとして
略て行深の秋れ夕くれハやさ哥なるさおへるとゑくる道
紀ふるき人ハひく見え哥也是ハさらなよそいり深味なる（又作くし勿）
漢しら佐有て面白くしもわりきよしるなる哥也修ま結果
作者は住吉ま百日参籠してそ寺住吉明神の御深をおろう
ありうさと祈念まうしに満する暁に夢うつゝともなく
おかれると此哥を告坊の内より正高なると浦沢の
声まつり上人ハ則住吉明神なと云よう子細あり
初は自作也

各もし花し染しなりありうしは色や見秋の夕暮

藤原宮内卿（家隆）

はるすきここゝろ柳の色らかるかさに雨けふすや一とも
のまいはてら出つくとへさするれさ深く雨くんとも
おしめの中よし春ハ梅柳ふら始て花ふとやき春を
みするもり桜やりく咲りしめて春の哭物数多
写何よしもされ緑り萬宗の哥よ
思はしや写の時よ咲花の春ま春の中よく咲のうつり
交者ハ仰むとさおもりく秋又春のそしきに何人ぞ
萩の色しあにこそ野への花くし花咲露よやと
あら月れさや月の精の乃果あとそへてわれらさとを
よりかよれもしと云よりまつるよ春し若葉まろう
秋の乃果し散るそゝ梅は花ゑくさの秋の葉哥
よ溝のやゝ君かしのうし白作れ花ともよとぬ世し
ことなるめて世中れ池ハくさくてわれきれ何てしいへ
らまも男和し世中みとこまなをは思いて溝の事とまや

の秋の夕くれなりといひけるは言也文従花のよしなき
物そりて面白し秋の夕の感を見る人は諸に只雪
やと思ふよ花と紅葉かなしき人可見るもめ出し海と
さくらさきを言也（巧言令色）ことをたくましうせしとらのとらとく
叱きりうとしせれは只實の事はあらしとこそ

後の月

あはれさの種のまかれも寝りしとて人それの身ある秋も有月
此名所に残り合て月しのゝ好書ある可聴き
まより平か月を見たるらし感情ふかく侍るとや今
の宗祇月をいみる人しはすとありし本歌
大あはれの種にやあるらん花の色よりも艶なる哉
なかやまの花のさかりけれといひし言に
人それのひとそしすやみるも萬の宗祇自書

よ月はゆかりなりとせしより此月は世に名ある
よりあはれのさかり文は脇にていはは月か見ゆらん
事とつきりふれて覚てんとそ侍り

左衛門督通光

武蔵野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風か末にふくらん
はてもなき野に生しきて侍りけるもいかなる風と云
修文の事も侍る必頭書ある所の侍るよ
け事いひしかたのみさみちる哀れそかいはゝ月哉
となしむのそみさしるたむさしぬと着よりいひ
詠まり此方山さみちるそこもはれとなき秋のそ
しるしといひ言むさむくて秋の末か武蔵野
の広き広たる風とあはれはさしんし詞に及ふ
何ともなくおもひ面白さに文此末はいかなる面白
きらあはれとせいかなる風にか吹やしたる風流なる

まゝ侍らんとみゆる也

大峯大武　雲家にて

月に於て異なるあり山にてはいつの出るか入るかの見へ
時ある月隠しよりとみるは常に山一の里は更けるを
さは只雲のかゝりにてならかとし更て月と雲とを
まちぬる也只ひとりある人の見ては只いとをかしき古詩
にも天山不弁何年雪合浦何迷旧日珠と
いへるもかゝる事也月をは雪とし玉とはしたる也

指政　後

古の歌にもあれ此五茂のさしむかひの庭の月を詠
ふるさとを詠しするをも似かよりけり形の字
いふる人の映の字こそ心にくけれ山すゝ映の字を萩
乃盛ふれは古今とてしはしなくてさへもよみ給へし
しかしながら猶ゆきてひとり見てなげくともあり

日其叢蒼年絶に露しけしてあり
按に裏有荊感也といへる月前草花之作者あり
よりて銘肝膽まわり布有こゝ
かゝる所に山の端にかゝれる霞光（指政）に隠る所其夜の月はさひしき
さそひ隠れとも御山は近き家の庭乃霞光
乃さゝれも言し深山幽谷の月はとくにもあらで
よそ所へ行おらぬこれ胸のうちをなぐさめ面白く
すかし深山月也

野々長明

深山まてに秋の夜の月見えぬにもあらぬ此気配松風
なにとも限しらる也我ならひの氏
秋の夜の月の秋のあらしきてしもすまと
なかはくて月まさく松風に只我ならひつゝみる
しきとして奉答し東西と

同植ふきても本歌と見つゝあるまじり月こそ
よくみるとのよそうれしかれ和歌のおもかげありてあると
なくとなおみれまとかな古今集遍昭の歌よ
山さくらあくにくれそてちる花ことくれそのやみぞ
くらし花とともにさかりきせて

道因法師
山はよれまてることも月の出るさかりよし出るを待つけん
つまて六文やる方よみてらと面白さのさらひるすとも
とけるてよしやよころとも一村立はりけるを
よこされてとらもしも飛花つするよ
すさみやる月さまよのこきさせてそこちさきさ
のおもみるやけさ

此うたれと字貌さ
さらい月此まち
ねすますらし
言離乃うりや
不学まさや一の
一ひとられひきて
さらかいさんる
なし

攝政殿

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月とこそ
月にやみぬるかるすさうあすまするし秋風ゝら
いとさらしやみるけましく又此秋風の音を松にのこして
おもてきらくかるすさ字ハ月をみるさらしよ秋
へり秋風ハうるすさ於るましし苗よも言ハなりけれ
又秋風さかなり秋ハ四の風やぬるよ

太上天皇

秋の露や袂よいてゝ山そふえん多ふかおわれやと法皇
いさといつのところゝ長夜わかれとい此長夜さし
退歴せさとふるゝ深院よすいれてあるゝさるを
ゆうてもなうにおわれや夜の秋此つらとられ
まつり月に露さやきつとすうめる秋のあはれのつさに
侍ゐ人とふけさとも歌ありはゝよ袖の露しぬ
かくるまゝて月も深雨えるよさまとをまし袖ゝると
月をあわれと思ひ侍ゆりんさ此まさとゝし袖ならい
わるすよとわそりしさらたらう貪情さきりうたけうす

通光卿

何よまし萱をなかめし暁の月につきぬるは秋の夕暮

秋の此頃しられさりけるさいはよるぬとく人云ける

下の句に歌にさのみし何とは心みく有明の月に

ゆくへもありとあらくと見えていへる也下の句秋の趣に

さうにみるにまさりけることなり下にも夕にかきしありし

よき心るへきあとて月の出るやとゝろ也又夕に書

かなめたるにいはゝ秋をいふとする心と見るを又夕に

侍りさるとも言ひて秋のまつ心をとゝまるを見よと志ゝに

ゐるあへきをはにもわかれとおもひとあるものをして

情更に思ひ月の出やうらぬるき事也かとありの

行きさえとこり

前中納言匡房

東とふる庭のちらみを見わたしはさ山のすゑに秋風を吹

秋のうらとふるのみとりは風もとすは近

いかにと思ひ難すれはしと寂は庭に印に書出て

みと見えて（すゑてみれは所々に行きうつりたるの事にかゝるとおもひ）絶のありて秋風のうらそ

よくいふ也と云り有心に書云也ふ体の風

情あり

俊恵法師

さりにをまよ本とて強ても深しかるし庭のうらのへなける

ある文字の心に歌のの心也といひんたあし例云遠

すゝゆゑ庭ハ秋かくかゝて歌よしらる何かハ山かく

趣うらくとも云所ハ庭のおつまて深山へ入行也

其言のん面白し是新骨のとりゐぬも本歌

寂山よ歌にかくらけ所庭のさきさ付て秋ハるさき

俊恵ハ人よ言すめきまへあらうとよ見てすハおもさかれ

とうしされ侍る也強る俊恵の言ハおもさるへうる冷泉

家よ伝はるとも何のさ通やかてゝら美て云法師

もし先達の導師ならハ初心の人を只流さんにより
いたつらにさりぬいはんや古人ハ実地を踏てきさらきと
昇りとくあつへきをふまへりこそ寄情意の字の意を
旧て見ハおもふ所と云へり此句に云ふ所也

通房へ

秋あれぬけは風のよそせしと山田のひさとまつやてゆく
はたの秋の中ゆるれも田をちひさとかくふには中
秋よりはるる也初秋より中秋にかけて風の音しはつ
夜るしろく秋しまつるに成行ほハ穿思わつる
もてつくかよう風の音しつゝ田々としくきよ
ひくよきいまのいやまりやてそひくさん風にゆら
せてやすといふ事を暑さまいまりつしきさんふかう
ねよるひくの秋ふかくなるまにひかれとなる事
よとみかやしよよおのうそ其也に此和き歌骨なりく
ひさいはるおもむひと或ものに
我門の奥よ社ひくと許て実あるのは晩ふく
忍のみ田はいわりも此ふるに云方にほとつるとあるる
はひふうハ各別のゆ見ハひえすしにひさみちゆかと
いふゝもるや

全

さてこれ書とふの見をいはんとしきりつくと
鹿の声をきく事の秋の晩にて面白く候ることと候
しきりやうくなるは鹿の時のなのかなしみをる
思ひたしも此句にも云ひ秋の来たりときこへると
らるの此ふ心をとけていふるなる也初秋のまゝ面白し
一説よりに思ひにそていふ也露の冬をとてそつれいて
宗祇の歌骨也秋になりてとて月をうらしとより
初秋のいと面白くなる梧桐風情候て東武よりそ

しらぬ変成わざしこそうし也
家隆し
虫の音しきりによわりぬるさとは松ばかりのみ松風ぞ吹
虫もあはれあはれといはゞいと憐みこそ右に申し侍る遅屋
しなくなりゆくとうしと思ふ事よ松松風の音と
きていうらえんと云人方しつやあはれといふ事也松ときこえ
字治ののいとこいはり本歌
鈴虫のこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふる涙かな
摂政　後し
里はあれて月やあらぬとうらみても誰あさぢふに衣うつらん
月やあらぬとは彼中将の雲の對すて居所侘定
いまは春思ひ出てうてられし昔にかはる蕉て
てはつるに月独は心すとあるよみて月やあら
ぬとよめるを此茅屋ゝ思ひ合て甚てらす里とい
ふことなりし文字をきいひけるを語りつめて衣代
うつらん迄てあくれまする也秋の恋れにい採そまる
月よしかのつらなむしまつる旅の恋れすたまるを
やて雲の對居事と思ひそ侘びしは心あるまことさ
也深ゆくる感情限りなき事也
定家し
秋とだにいはれんと思ふ月影をさしわやあのゝ小川衣かね
月いつるあて秋のつくさとえもえんと思ふは怜らく
てこゝ年昔よし月影見るる秋のる月ひう
と思ひてなつかしんと云事も秋とだにえもえんと
云かれもく思ひてやかく秋と思え出えんと
よみ給ふに衣をうつ音はやよの文字を関く秋
うさい文字よしあるといつるしまえてしわやよなる
哀ほとりて言特なる事也わやするとい　和讃をとゝふ

初心抄

みよしのゝ山の秋風さよふけてふるさとさむく衣うつなり　参議雅経

みよしのはさむきよなよなにころもうつとて故郷の秋のさむく
はるかなるとて山の雪高きも秋のゆふくれの
あまり見る花もなきと題して故郷のさむきに
故郷を来て秋のつくしさのよるよるに還てみ
くるしと感ずる衣に砧の声のよくもひゞくなり
いとゞあはれをそふるとてものさびしくさむく
とはりて衣とは砧の音をつけ
ゆふかたにさむくし砧の音に對して感慨
をつくす心の言葉のいひ
八月九月正長夜千聲萬聲無止時

寂蓮法師

村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋のゆふくれ

村雨といふはさとふりて晴るゝ雨なり夏もふる物なれど
よく思ふべし　村雨のはれゆくによる露の
ひるまもなく文字の外の秋の気色の心あり
ことさら下のは村雨露の槙の葉をさびしき
も言葉の感情をみてたゞならぬもの　此村雨
露霧の景をみるに哀れなるとふかく思ひ
うかびとゞめよ

凡河内躬恒

神なびのみむろの山をすぎしかなしき人にたちそひ霧の衣たちさ
猿丸の衣さへとおもひとまなく霧がくれ
いそぎて野辺の秋の色をみるにいとあはれ
しるべさし打そへて衣よし見えやと思ひて
あきをよめるにてしのぶ心を述

しをれは萩に立てまかふとふかきといへる上は論の
なきとしてやまん我は今してやつ須によれしさて
ハあつもしきところをとへくされとはいさしりかさせぬの
字よりも殊に奇をとりて按るに　松のかゝるよの哀
吹入しそし嵐はみにあるから（又は）たのみつかしく
落らいはすくて月をそころすの花

蕪鳴伯

秋をつくわかれし露しかな草は里とふ拙こゝろをうつり
草に深草はあわれをみとのしるし作り
目に増補に[illegible]とへくをいて里と出てつまらしい
とゝ深草野とやうかた人　野となつしろうと
増て何おし人ろよたは哭子かこちらんとくつわ
みなかに也たとへてもかうといへれと杜とへく
とうりて音おさ作のく世からさ海とう比人

たのめわかれし露しかくやから深草を添向へかゝす
論の三木とえて何ぞりの野の所とあふし論せと
感てとよみかへてとよりたり餘のたるよし似せ
論いへ人くるれの歌山を乗て何との字管道　すよし
意くそこ此の言もそいへ作り　論ゆ也庭の篠東宗
とてよめり

酒芝に

の日さすかたの尾花ちるひさたり杜風に論作らん
薄の尾花夕日に升らいく音風面白さおもしろ
論の作を写て杜いたり杜てされ河ふまそてくるきら
とさくめて以かう言也論をうることと方へとりて以也
下也くいふ河をよくうしやし尾みてしみ共との
しさといふ思ひやまとうてむらいそそろん切り
まよ作り跡か杜風みとくこつかたの初也

太上て宜

枯蘆になけや霜かれきりぎりす　やゝさみしからしさよ（の霜月）
蘆も枯いまゝけうまで秋の内より霜おきそめて
八月ありしと蘆に蘆ならずと也何のよしと何とも
生え曲りきいぬく蘆をおしなれしこたらずくらけ
やうなる蘆をおしこ枯とうくことなりし必切なる
切し酒酒御前に
なりけりや蘆田の枯れなりとも白石よこそ人喜すると
とおそりたらうけやしりし也　春風桃李花
開日秋露梧桐葉落時　此詩は面白しさみしら
うれしさ何かをとりけすらん

言問や冬よなりかんとよしやれにきた旅人
海に深く思ひ廻したる句也

言問で

言問はおのかれて
なりかやりけよし海中や旅るんぞとうりて

此所は　言問のみちなそうう蘆原さうしはそこしかや
さらさんとよあらよ又くらしありまて月くしく之風の花
うく咲おうてる付くハ言問よ渡ぞ来ならしさとうて花の葉
なるけるよお菜散るはす時らは花の風やまく
かれんとらう利根ありけるらん也

如子（内観上）

桐の葉ふしかやらかてゆやうりありけり事入の事門とはなけせと
桐ハ秋の落れなし一葉散るとありてさびしく桐の事也
古詩に梧桐一葉落天下皆知秋　春風桃李
花開日秋露梧桐葉落時とあり　此句かこら
かつといふ葦秋の事也　此桐乃一葉落から
とりくわれんと催とあて結とはなけれとも
さあしさいはすれ思ひつしれうよりとろふ
人もなく桐の葉ちりて落かゝりて居たし見ゆる也

かくの如く人命をしるなり必人を殺すまじきなれ
しかれどもいかにして此たびはかくまでけんといふなれ
りとて必人を殺すとなけれども只一つ有事も
めでたき字所なり

松よりも花はおぼろにて敷よ帯りかね西（西行法師）
此の文字何あるや松は常住なる物なれば其の松よ
らいそう落葉（葛）するといへばちりはてさせて風すゞしん
とよくいひし古人（まさに）此のうつりなりけるさり
かつ又夏秋にかけて風吹きさみ敷めん
ほまれ称有る西哉（そ）といふ風すゞしんといふ
ほとゝ風をむすびつゝ吟る也ゆゑ有るより
てんからん
雨つゆをうけてわかれこし人の世
すさめ弱しすさめんといふは文別のこと也

冬之部　芳賀（加）宗鈴下
いろ／＼と（落葉）ことばえん（出）とはいふなれど出（まま）あらし
落葉と云（去）ふ是れは訳もまゝあり（其）のまたる意也
かくいふ人はかやうにも事上る所有るは此まゝおもひ侍り
たゞ人の此の葉の（落）ちに散りゆきさらさてはこのころ
の風のけしき（な）きもやみても散るうつり
それにつけてもいとゞ有声有人詩にも二字（破）訳にはも訳
またあらゆる字を出すとして作者有り落葉詩よ追
英光与呉国月毎朝聲如漢林風是れ落
葉と云ふ字なりけり

俊秋鈴下
日くれまへ人しれず此のうちの落の風にさそはれて
深山落葉といふ訳やまへはあらず尽（畫）は自然に
中でしたふ文人とあり日暮ていふ人しる音をすゞしむ

嵐の音ハかりしたる深山の感情をいふなり言も山里の
みせものハかし吾ハかりしてといひさしたるなり
山路日落満耳者唯樵歌牧笛聲

純白　作師

時雨の雨にぬれてやすらふ山賤のときいつの木の陰その下葉ハ
枝いとさびしたる形を気にしたる事なしとおもふを
よく気にて時雨にやすらふ姿す害直なり
樵はそらかならん時雨晴ゆくとみてハいさきすすまれ
ちりあへん時雨のいさをそ云ふんしんと見ひやられ
紛と源なく大津の音や納秘とへしけいの
かよふて後の底なんとや気にかけん立田山松
ハ時雨にあつまぬなん

二条院讃岐

世にふるハ苦しきものを槙の屋にやすくも過る村時雨

世にふるとハ世を経る也時雨の古りてくるふ家によく似たけ
たり也言ハ其身の上の経つる事な[illegible]たるる也
世のくるしきハいつも世をふるの風よりそはみたれおもくさすと
云句まていひさしたるもの也時雨さりつたとよむるを見
我世をふるハ身のくるしきにやすく過るを時雨のうらやましきに
時雨は[illegible]しなけにやすくも過るとよめり
ちくれの[illegible]也

山路隠し

有明のいく夜袖てくりしん時雨にふらるる有明の月
月とをかしからふとさらとさ八ふらりて大袖に
送信るするあてのこもわしつのとよありしていは袖
よくりとハ色をとなをさあ寸といひて感情の袖
乃露にやとる月氣の時雨もしみしと晴ましく
こゆくこそくをいく有袖によくりしんといふ也

乃趣に可向つゝれつ又行也

冬枯乃もりの朽葉の霜の上におちたる月の影のさやけさ　清輔朝臣

此哥寒き道具四まで有り冬枯朽葉霜の上月影也さやけさといひつめたる物なれどもいひおとして餘情ある也此歌水晶を瑠璃の壺に入たるやうなるをとりかさね也結句ニ影のさやけさ冴しるを寒しといひさしたる所也落ちる月入方の月よりもわくれ落葉のうへに指さしてなく影すさやかなりたるさま也　東坡　霜露既降木葉尽脱人影在地仰テ見明月ヲ

太上天皇

みるもあはれなりきそを袖ぬれ也かつきかゝりつゝ霜風に寒き夜乃ねさしこゝ民のうへとし御身にはぢぬる

そも延喜聖代乃寒き夜ニ御衣をぬがれ給ひし有さまおぼしめしけるあとをしも此王道乃こゝろを詠事を季物ニ用ゐしと覚へしなくたゝこそあれさ寒き夜ハ御寝所の嵐のおと冴えまさりてしめて万民のうへを思召しては猶と覚しめして御一念ニもと御身のあはれたるよりもそれより御心遣也給ひし乃御情也此御心と思ひまゐらする也御作意かくこりて風情を表きよりかゝりをさきとせられたる也

津の国の難波の春ハ夢なれやあしの枯葉に風わたる也　西行法師

有人の歌也津の国と難波といふんなき也難波とハはのゝこゝろとみすれとこゝ也蘆の葉の秋のくさまやうなるハし枯葉ニ風わたりハ一聴の夢也蘆乃枯葉をよりて夢さめたる思ひ深なりところ也

梅殿　後し

かすみの袖に散しもしもかきとけて霞みよれ花そ見へさ
氷しもとかきとけてとつけらまくう言ひ亭
そ見つさきまま文珠要を外のおさしとくて行かは
とふるけままを拾ふまゐまし四以下し侍よいめく
アしあれともちやくとさあゐまし花しはくうさうを
花うへし　く紀とおそいさみへし　又脚所よ
月白よ菜の庵はすてさて頼の軍は長うへさ
とおそくさみへし見し同く思文月晩秋ませは寄よ
春日野よまきのしやくぬすの菫の
そし同く思海よわてし　ことのうら〳〵

鶴田　仕師

夕されくさや風出てみちれくの雨は玉り　ゑもうるう
言れくいわくふ安り雨の玉り涌てつくさうを

彼所乃夕風よするは鳴らう夕は所さあうのまゝに
いひ出とろ言ひ見し上のさとさらり見て所うり
此所さんよ面白し　兄わかれちりよ骨髄よたつそ
四人何よ取りたりよと思へさしゆ是題アされ
侍しせ

此方我ア

かまくらのこゝら世と言つて言つら庵よはやう初雪
此うつし言よわつてく候うとこ我も世とよつりい
領らかよの中う世と雪やとつてかりつりゝも雪し
日数つりうすし消へ〳〵こゝ何へ松う〳〵〳〵初雪
とらいちらん面白初雪はかつうりしくて人し無うる
独よんつるく雪の清けりとみていうすぬ雪と我身と
とり合てよあり雪の消うよ我身あれきてし縁あり
世よかまくらさこそはれこえ野の宿あつけたかこゝろうてん

ゑ君法し

寂ゝり附句ハさゝやかなる思ひとふりそめつるハ我身如くろ

寂蓮法師

尋ねけさたよ人のまれなるこ山里ハ雪のふかけれ

閑居山林の隠れし初雪を見なれて毎も助としあり

面白き時も同しくハ此初雪を悲てまさ人もなし

こそやと思ひなん帰りてたのむ思ひもりや此雪に

問はんとまうすこいはんやかりつもりて道そなん

方しるへき雪の道はさそへて恋しくまされ侍らん

といふ句ハうちけされたとへ初雪のふく雲の

夕暮ともなハ冬ふかく成てのちはいかゝ成ゝの

中に入れのまにてつもらんの帰の見る肝

要なり

駒とめて袖うちはらふかけもなし佐野のわたりの雪の夕暮

定家ニ

此歌骨髄也中古の秀逸也当時人々申しとよめるよ

いはんや雪の夕ハとかく云ふ方なき事也かくてハ

けしきとはいふとおもひけりといふとそて払ひと

わひなしにといひ（な）ほわひしくいの哉なんと本歌ハ

苦しくもふりくる雨か三輪の崎さのゝわたりに家もあらなくに

同

まつ人のふもとの道や絶ぬらん軒はの杉に雪重るなり

まつ人の麓の道とハ古き事て山里の老雪をまつ時

さに来るへき人の此深雪に道もあるましと思ひ

絶んと軒の杉に雪のふりつもりとそこら秀逸也

詞ゟ山里まて人を待る此雪ゟ思ひやるにしるまし

粥て其の心して絶ぬへし思のやむ事ならしつきとよめると

云歌也としれて杉されとも唯木葉ハ

深き見てよみ給ひし也

赤人

田子のうらにうち出て見れは白妙の富士のたかねに雪はふりつゝ
眼前の躰也つゝといふ字に京極ありて言語不可
て說なり云也私云白妙といふこの句に心をつくへし
雪は降くと白妙にみなれたるも冨士の雪ハ一入
目にたちて面白く見ゆると云也世にある雪ハさ
しくらへてさかゆるのことゝいふ心にてあるへしと見
常縁云々也

曽祢好忠

み草のゐしをのゝ今さらに雪つもるとて見る人はなき
み草とハ枯たるしのゝといふ人有也み草のう
といふハ袖みのゝ也その所ふさ人とハめくの香を含
てハよしきてらしとや由に歎きり云也人の見れ
たうとしかけし郡の字といふ也草と女ありゝハ枯

乃字此方の方をとりていふ也本歌
羽の舞山の白雪かゝるそへのあんなのをとつきしとを

西行

むかし見し庭のこさに年ふりて見ん世よし似た宝家
昔あるとい信の河を思へいまやらし世といふり殊世
のありしはのるをみしの言の字る志也捨あるさ
とつしうきまとつことけりのやいのしくゝるみせす
とて志てうるさし定そなりまてくるめとゝいふり
あいすりし世思とゝいふぬし昔をもつてうゝまそ
わりさりおりハ出てら也

後徳大寺左大臣

石ゝれるの河は浪枕をやくし葉の名にあるかな
山川もそハなれ〳〵ありてよく落行之一葉の言の
事きれなりとも枕するやうに浪枕と流れの

春を惜よ来つゝ過さいやすきこゝろをいふ也又源氏
に右近初瀬にて玉かつらに逢てまうて
二本の杉のたちとを尋ねすは古川野へに君を見ましや
とよめるも同し心にてかくれ給ひし人をしのふ
心なるへし　本哥は古今に
きみならてたれにかみせむ梅の花あはれしらるゝ月影を
宿のかれしにけるもしらぬ人は思はさるへき心也

雑ノ部　賀歌

仁徳天皇御哥

たかき屋にのほりて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

高き屋とは楼閣のこと也　万民とは此御代にかくて
民の富にて家の煙もたちにきはひけるを心よろこひ給ふ御哥也　聖代
といふは人のゆたかなる時をいふ也　五日風十日一雨
の世の心地するようこそありけり
とよみ人もちいん

はつ春のはつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉の緒

此哥志賀寺上人の事也　京極乃御息所乃志賀の
花見に詣し給ひし時（志賀寺）上人老僧八十にあまる
此御覧をまつりて其御車の後を追て都へ参りてくると
申されしを御門より申次人もなかりしに御所とやかくおはせは
しつらひけるを御息所きこしめして上人をめされ
御見参あるに御手をとりて申されしうたは此哥也
人ありてまことにあはれと思ふ御心にてなりき思ひ沈
みつゝ此志のかなしけるにも今は何事も思ひ給
はまゝならて此思ひのはれぬ事をよみてたてまつり
けれは御息所御返しに

けふそきく法のことのはを人して我をいさなへゆらく玉の緒

とあそはされしといふ説あり　今はさまてもあらしの説
まよりかくよ今生とはつかしとなけきてひとつの義也　本説は

ゆゑにあてゝ見るべし　又首書云八雲抄ニ天平宝字
二年正月三日應詔旨（首）家持作但依大蔵政不
勘奏者也トアリ倭訓口傳ニハ子日ノ松ッ以テ帚
に作て正月（ムツキ）ノ初子ノ日蚕ッ養屋をはくといへり
又只玉をはしらかすによりて玉帚といふなどいへる説
乃帚としるべし　私云玉帚ノ事家持作ノ万葉
にあり仲方と一人の思ひをのせて詠せられ也これ良所
乃古言ハ今の言に違ひてわかりがたくよしなき説
あるとぞ心得べし

摂政（海）

ぬばたまそかとまろくれくの露霜よあはまくそら竟いく世へぬらん
まろしハ梯かゝり佳樹よかゝりて秋をまつへしとぞ
ぬばたまそおりとやいふ露よめでゝひかるよし子世ハいふ
さきといふなる也　ぬばたまそかとも山路のゝく世露乃
おもふ子をしれハへよ本ん世方とりて後成つ
佳人のおり袖よおしろ菊の露うらうらにし世ハ只
て照光といへハ信濃皇太神乃御事也

清輔朝臣

年へたる宇治の橋守こととはんいく世へなりぬ水の水かみと
橋守ハ元来宇治ニて余ありしよ云河清輔出題
河の久濯とこそ歌よまれしと又右の歌ハ出来
まれも清輔出来せて皆歌老の歌と誇りつゝに
清輔汗をながしけりとこそ葉也けり
とも出来やて各し笑ひと語りけるに洪方とゝある
ても今さるにてあらしハ此歌の文字別なり
わかへと忠へてさき題しまた伴とありぬとも
始ハ年たのみぞいとまとありとも大かた宜く
たよりしハおもへるれともえとはひぬと知も志

有りさまなる也今の世ハすこしぬきなかりて我より上
の人ハあらしと思ひ侍りて人々に志らさぬよ上手す
るさき道湯桶此文字を読んと推まうし心ハ文字へら
とらうをまよいく世にぬめとい云それとい云と沉思せら
きうしせされしも宇治の川みちりぬるとも入はゞ字
てうり若るまてハ答しと理を付ら五文字之亭
此事り字也本字ハ
右　ゑくやかうらけ標するまれかてそかりれし思子の宮

哀傷歌

和泉式部

寝覚する身を吹とほす風の音を昔ハ袖のよそにきゝけん
人にをくれて歌をよみけるひとりねとて忘れてもとくしら
枕覚にも思ひ出てら袖とふ風の音しるもと頃と寺
アよるのしかくもきこてかれし風の音ね
そうくしかゝらかゝらんと昔いうさととゝるすさ
とも云ひてと枕にまつはる人まくらのとはあり哥也袖の上に枕
あまた人の哥おほし拾遺集の哥に　秋くれしゆやと
より此松風とい侍るかうりにあはれそふしと也

定家

玉ゆらの露も涙もとゝまらすなき人こふる宿の秋かせ
玉ゆらとハ露の枕詞也あるも也玉しゆらといふ詞
まも露涙しとゝめかねて也露涙ともにとゝまらぬ
よせ哥の如くなるところ也此哥の詞書に母の身まかり
けり秋野分しける日もてすみけるところにまかり
てよめり　故郷有母秋風涙とあり母のあり時さへ
秋風涙と古人のいひおきたるにいはんやなき人の君
の秋風よとと詠しける哥也長へ濃なる所
限なくあはれふかしこの哥に絶々て
秋にあり風の原しく

渺よ渡る人ハしらるゝや波あ人のくるを思ひやりて
見はへし

太上天皇

なにはへのかさしは雲やたちぬらん夕は雨りところハみをねと
毎年雲常しと云説よいひ出て出すらす意粉おり
くハ世よの世ちたと説ねたよりに雲となり雨となると
いへし楚の王のきしわり我をなけく人の歌見ハ此の
たよりしるし　これといふへの事と思へるやハ此夕の
雨よその名ハみやれは一へなりしことあそいつらり
九重の及つゝ示るし寸我恋しり雨すゝ八きし

○楚襄王云宋玉
巫山神女賦
ある〻観夢ニ
枕席ヲいひて
去而辞ニ曰
妾在之

ふすゝ巫山之阻旦為行雲暮為行雨朝朝暮暮陽
臺之下旦視之如言故為立廟号曰朝雲
たるるとしそてまつるきかくや

能因法師

あはれ人ハ昔の命をたちまちせしなかめのおしよちさらちる
一本草書対馬守よ任りてくたりて
命あらしよ又とてかへらんはの世れ雖彼おり此の芸の絶よ
とよふて下りけるかの世まて君はらりしよきて
あらし云也もと浪と命あくまりをいはしぬ色
芸れ気ハ秋よおいてりくらす此之その芸色の気
枯葉し秘り侍るよ芸のか紅葉しと称せしへ又此歌
ぬうらの名を入てかくれてちきし所しおしとのひさ
しらう云也

紫式部

これぬ世のめてし思ひて人の世れありれをとうそ何ハえらまさ
貫之紀友則よりも形ちまその云よ
あすたしめ和歌と思へとこれあられ云はん人ある想ひ?れ
とよかう我身のうちとハたうぶ哥ともつくるとをわれ

とふ世大和歌の流よ　あすさへぬ命もしらぬ身よ猶くれう
らやよ喜けく思ひ寸しられ世の中は毎よとこれ娘（て）のなけく
よよあつ云世人の世のわかれを云つそろいくろすさとハ
我身のことをのく思ひやりてよあつ云也
余情りうらつなつくわハれみつさ云也

離別ア　中納言兼輔

相坂の関よ我やと無りせしおもふ人の行たのまもちおや
此云ハ愛別離苦の常住壊空の四劫をよあり
苦より相坂とハ逢と云縁あよのこるうくはつ相
坂と云所よすむ（流に）しあそうか故よ思ひをくへとしなの
すゝとふてり住壊ぬ流り業平の文ぬ坂の関を
らるんとふつかしれるうしん也
あまうへ別あぬ坂の関ぬよ今ハ浪のけそ形さ
此云しお坂あるかなよみる事ハわかりとよあり

加賀左衛門

天河うしにきあてし西出よハ我そ帰りてと離ハかるさ
此云乃初出よ若き秋の七月七日たくへくらゝ
もとううふへるれん事と思ひて八日の暁をひて再
よのつ宵よつつりしけうとありよめ雪えくりあ文字
天河とあけつ事ハきとくあるうぬをいつも我そまさ
やそとハ岩住へ云よ
あよりまきりておしき命ほ君よこてひあの年と思ふ
とうくゝとつくして我そまさりてとよめり恋ゆまさ
らし西出とふ天河とどさけてりはあわれをと思ふ
西出ハまよふりまてとふつ云とよってよあり

云しあり

忘らなさし官の被ハうくうとふかさしみさうつよの月氣
あるへきをくあうふなき人の命のゆりこん余ほ之

らぬなとこ集よ歌かゝりあとすかし袂の涙にやとる月と

見その云るへし 袂ハうつゝもとこにひとりの友よ

なけく袂の涙にやとる月のあかりハひとりくらへ

されとも月ハ袂にやとりへし それをかこちふせんと契

さりゆき涙にくもるをさるせなり（たのこ） かくれなる云せそこ

まとハ集にとこゝ也 親房卿下句よ

かこちよや上毛れ衰とくゝつゝん友寝の夢のりつこは（なく）

とよありし集にとこ歌也

人丸

篠の葉ハ三山しそよふ（さやくと）ふらめり我ハいも思ふわかれきぬれ

きよにとこ同八それや（れ）にとこ同也 遠まと離

て思ひ出てこゝろはいも妹のさハくとさくや又山

ちれ篠の葉しゝさつゝそ見て思ふ妹の別れと

云るも羇旅のさまなれハ感情かくあるへき也

羇旅ハ大きなる題也國をへとしあるくへてそさりや

ありあす へ ――

梅乃仲 郎下

みちのくのとふの風音をぬよつまなくもあり秋也背

とふの菅ハ名所也十ふのすかこもとよめりハとふのすかこも

よりあみて出せるものしせ風の音をぬとふ風の音

つましせぬよく云る事陸奥國ニ住る

世よあつかへるまれ我と思ひ出てよめりし哉云る

みちのくのとふのすかこも七ふにハ君をねさせて三ふに我ねん

家隆卿

あきそ又こゆるさ山の嵐ふけや雲間の月見ましつ雲

かりねをなけきあかす秋白雲の一村月よたる

いさよりくとみてあかすハ又われ白雲のうはそをと

まそこしめしら海よるめりしきつゝぬれ山中にやと。

つきなれたらん高野之白雲ハ深山のさかゐよあらぬ
なまらん之月に向て出るけさらん歯としけり

芭園り

あつまれよはのなかめやかすみなん都の山そうは見訳
月はいつくよりしすむとしらぬ船てあけさわ寸
記の海よるれから月るまはらの海を都よかくるきと
ゞの感情及さくや都の山より月とは或語に（天台止観）
月隠重山挙扇喩之とあり又あつまより
都へ雨すれしかくのことしよあり

俊成女

かくてしわをいく都ふあ見ん山られ昔は落の山今は
此神の五文字知此してりといふる也都よあつて内
はるそきるれ風としいひ錦の志とねさとあるを
まてしも松風の音さ夜いともいひしよ勝と云ふ

るはあかやけしとさくらし昔の都よ咲しくらし
雲と衣とし二つあれいらと雲と風と深と
もの事と猿の奇事とす此方すれそり理を鋳ぶ
方也昔の遊よかくしてれしのさうら方也亭おかう
ちるるさなうしよし亭おかり掛遊の方よ
かふうちろて世をやけるしてあ花のときかしみと
とやかうの方れつくるかしか此あろうぬとてく文字ある
文雅図のかくつくれあれ花とあいしか此し
てといふ句へ也

定家

いにくより今宵は花とりむ日と夕られの香れあかしよ
此句一首はからむ高谷しから方也もろて方しそく
いれまし深き山まてこのひさなくより花をりゆへ
と思ひよつひてさすまうりよさもてしと花まさき

つきかゝりておりしもさるよ峯の嵐よりそ君ハうらめ

と理をつけて云歌也　有家云々よ

岩かねの床に嵐をかたしきてひとりやねなんさよの中山

家隆
たきの音松の嵐もなれぬれハうちぬるほとの夢ハ見せけり（ことハもなしこえひ易）

きゝなれてしやの夜ハ夢もみし一首の趣を以可味之

家隆

吹よきてしく嵐のをとしけにと見すれぬ人をさやの中山

此山にそハ嵐さへ教まて身にしたハりけれハ何のよ哉

とならふる我わる人へ強ハ嵐を哉としてき君として

けあるうちとうもんハ也嵐の音しけとくりかえさ

以てハうまとし物しく吹人ハ忘まあと云切る

以也本哥云

東路乃さやの中山なか／＼に何しか人を思ひそめけん

さやといふ事ハしかと云詞也用所まありてさや

とゝまるよしはふ詞也

同

よもねぬる夜の夢路ハゆるせうつの山関ハきすとも人とゝめし

本哥　するかなるうつの山へのうつゝにも夢にも人に

わぬなりけりとあり彼すゝて夢にもひとめぬと

ゆるせといへる海関のうつの山をよみて夢路とし通

さまし人へ海名もとハゆゝゆるせとよめりさやの山ハ別と

いへることもつてハ関するとかハ関といふさうすと

そり渺々の風流なる姿也　兼関の字よし

右海の関夢を通さぬ汐の夢と思ひわたるとよめる君となるを

とゝめたまへりてとも関といふ縁をもりていへる也

恋一　　中納言兼輔（相楽郡）

みかの原わきてなかるゝいつみ川いつみきとてか恋しかるらん

みかの原泉川共に山城国相楽郡同所の名也

泉川いつみきといふ序の句に用ひて歌によみつゞけん

よみ也泉川といふよりいつみきとて[illegible]也といひか

わりとらやく川のゆく波わたり流るゝと云ん

なりみかの原わきてとはいへそもそも見えそめしとは[illegible]

川もその源は細き流れもつゝ深くなりてするは

しそれを思ひへていふ也

摂政

石上ふるの神杉ふりぬれど[illegible]いでずと露も時雨も

影とまりしより[illegible]いその[illegible]ふるといふ人[illegible]

神杉ふりぬまでと[illegible]いはず[illegible]

出[illegible]文[illegible]とそ[illegible]も

ところ[illegible]出ねはこそ人はしらね[illegible]

ふかき[illegible]時雨は[illegible]

云[illegible]

いそのかみふるの山[illegible]桜花[illegible]人[illegible]とこそ人[illegible]

恋同

我恋は松を時雨のそめかねて真葛か原に風さはく也

人のつれなき[illegible]を松とし我思ひ[illegible]を時雨

[illegible]とよみて[illegible]也我恋[illegible]の[illegible]の[illegible]て松を

時雨のそめかねたる如くなと云五文字之[illegible]すり原に

[illegible]見[illegible]とも[illegible]つれなきを[illegible]ね之然

[illegible]とも[illegible]とて真葛か原と云葛の[illegible]

[illegible]名[illegible]葛[illegible]と[illegible]字力の[illegible]

字[illegible]根のつゝ[illegible]といへん[illegible]

[illegible]只[illegible]川よと[illegible]云也

よみひとしらす

にごり江のすまんことこそかたからめいかでほのかに影とみ絶し

此江の字を濁といふによせてよめり昔のりかれ此

のこえあうりつゝり

大かたはそこしも何なくよあのまふかうくえい此

難波人いかゝえなるらんさん遣とすることあるを見て

うのぶんは江の濁りさる程に影のみみれとおもひて

よそや江のまことさへ影かきるに思ひの晴やら

ねばのみ影をみとましといふ切になりみするを

見せましとよめり みすりなり所にてんのすつさ云

芳之慈

暑さをりいとゝけれぬなる池にあつけてそゝり きよの一患

此字西の程にみるのさみ暑くらふ云さくわうて池之と

し水アとはり作とてくるひそうりさそくせかせうし

あとひうしかのんにいとゝいゆそこみなのまに暑

乃以と見てくてるはつゝひるうさ人此あふさあるす

さまゝに入てさてはや翔いれひとりねるまて程さうと

いふや影しく文字の契深さをそへ家をすとよ

山门に独おりみそてしる也ん見てはつみえ池みか

あとを舟とねさそてせんとはうななることひのもとを関や

いふる浮寝の床やるれゐん浣らいよかりこそ

摂政殿

梶をた人ゆらのとをわたる舟のたよりもしらぬ沖つ

つらきあまりしは梶をとおさめよりいの字也浦の浪ゐてる

うきはりゐよりて梶おき寄まかせてやるとその

よく称意しはのたよりしなし魚は去つかせとは

塩は満干ありぬるもてよう四ず事と身とも云

本分

もしほたれつゝわふと人答へよ　行平としるしめしそのうらに
いらへとこそ答とよめと書てやゝ須磨の浦に書つけし海人
のもちめのやれぬめるやしやすらは須磨の海といへる事とかや

赤石潟

さゝ人をよ浪よせて波よせて海人たかり（判取イ）とさわくれ八つ子の浦にしやかせ
此方へ遠き海へ出てよるは浦のさかへしるし
風のもらかりとしてふね其のとくもつ見つしにひ
まつきはいうしと風してよるうなやのかは源将
源はいとからけみしてかれ海の風のさわくぬかぬ
其のさめの真のいか袖によりとちやまつけよ八子の浦
へるまさこあへんとつけてをかみとさゝれくさ浦なれて

俊成女

わきのかれみるめと浪よせ人はなつさの風さくねよ
海松と見る間よいのましてよめつゝとゝろめと浪よ

とふみるめしるときと名をといふんなめくなつきの濱とい名
とつけたり我忘るゝなくさんと思へも叶はされ
かくてわかるゝまはかれもよくなつきと思ひつゝ名は
なきのみそと那もいひまとゝるゝうや
見るめかゝりかさやつゝそさはすこてよれはせしつよ（のまりか）
わきあはりてすしまれ歌しと様にてなのめ無とゝらは

俊成女

さてりしよ思ひきてるんてうらにたるさことやのくそらに地き
下りしといふ梅すの在所はきるとれ思ひのいもその煙は思ふ
ひとみとしし思ひきんてうらはなの浪しかう
むるさきやことて感ぬるめくるゝの下
めしといひいひ出するまゝしたのくいの浪しめとりするしと
まう云やいひ出るますしるゝへんのつらよ思ひときゆと
いふなりや

こそひてきゝてやすらかなる哥　逢見すと思ひこかるゝ煙くらべよ
といはるゝに恋の煙と如何して見えつゝありと立にこそあれ
元政
なひくるあまのもしほ火さしそめて煙ハ恋よくゆりなふ
煙ハ恋よくゆうとはいふもしをかきまかり也ひとるを思ひの煙
の恋よしはかり出也此恋の煙の恋よさりつゝとよろしき
人への恋ともなひしといふにや此哥言書元活
判よくゆるとてそいひすてしけれなゆうハいつもと
難せしまいり語ふの人敢まれし哥字とをれ
而とをさまやと傍例のなくしたうとやこそ殊に重き
随卿　哥よ
草枕いくよいかりしとふらんやそとをきとやつかるよ
さらと雲須也而てやいてとゝとあきあまり通あり
ならゆうなゆう月なあし

左持　通光
限りある世をかへ山花すてし蔭露つゝんで此露そなれく
哥つゝいふ名をりしら山なるハ名あつくつゝし見えまし
こと書なるとも此おかすたにしつきりおもひまて名侘
く露の名そのともいまり世ハ事れ名て出つゝしてをり
そといふ也哥そ名侘くら涙れるゆ何事しうちら
乃あつ地ゐまゐいハ名侘ふ也と一夜ハ名をも出へしや
右勝　後
草かつき夏野ならしさそ見ゆ舌まてそしれ露そとある
夜の間に床いなりぬれをされとし書とい文つ地とら人
乃そりしとうして夜し床をとらなし　寛永十年
まりすりかくして書と思へらやありそて床の名となや
哥そこれいとい波のなし床の如くをまへまてみえぬ
とゆといつりまれさんくまり

通光て

なかゝとぬをれといひしにぬそ見えぬ恋そのゆふくれの花

さと人ハ夕れぬるすくわかれる時ふされとなるひと

なきれゝもなりぬやうよそれすぬやかし用にて。（うゆるかし）

夕れ感情とよあらんなあゝさ夕ハうき物といよや

それぬそまて何ゝのあハれんとふるゝと今くゝら

宗也云雲のゝたそといふ村ゝさゝやゝなとといろけら

あるからうすく〻守すす

外くれハ雲のゝそてよぬそおりふ（あれハそなる人也云ふとそ）

俊成て

ちらぬゝさよる葉ハ葉乳ゐにしてし露ゝ涼へきぬ夕に

ちゝれゝよといハすゝるゝ秋也ありにてしとゐゐさ

秋まてしとはいふ夏のかゝへすハ〻まゝさへゝてしおれ

ハ夏し出へさよりんやゆてハ秋のゆるよしかゝと

いつ宗也云ハわれかゝとおもしとわれぬとをなけるさよ

うきこと云てふと夕さと可也云るゝと云見ハむかりて

よし人し（き）まゝりさの気をよ何ゝり俊成てよ哉人

ある々ハ名まよ也ハやさしきみるよましてよ哉し

ゆさよれしとや

有家（朝臣）

つれなさのたくひまてやはつらからぬ月をもめてし有明の

そら思ひのせんかたなきにやるかたなくしまうさるゝと腕

とゝてなかきもうらみあまゝしと思ひよそれ

しろるハ可よ有明の月ハつれなきものと也て後集ハ

月をしたひなからもつれなきを人とたはふれしら

宗也云句かすゝかしぬといつかりそりといふ也

乃守家~~拾遺集~~よ　かくちゝしちゝて其や

はらゝてゆふれの時ハとかりやみすく　此哉

寂蓮本歌ハ

むら雨のつゆまたみしまきのはにきりたちのほる秋の夕暮

大意ハ月とし[illegible]そのかりの[illegible]

定家（卿）

[illegible]ちるまさ山原のあれし[illegible]

ほよ[illegible]文字を行つ験ハそて[illegible]

[illegible]けれ験ハ[illegible]とへ[illegible]の

夕[illegible]の[illegible]

[illegible]

西行（法師）

[illegible]命と[illegible]と思ひきや[illegible]かりけるまん[illegible]

命[illegible]中し命[illegible]

思ひし[illegible]命ハ[illegible]人ハ後[illegible]命[illegible]

思ひ[illegible]風情[illegible]

有[illegible]

摂政（良経）

みしらん秋をなにゝのこさん[illegible]春の[illegible]

[illegible]秋ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

小侍従

待よひにふけ行かねのこゑきけはあかぬ別れのとりハものかは

夕を忘るゝといふ古人のしらさる時よりいひならはし
なりけり思ふ心ハ人もし此夕をハいやとくかへるとおもふ人を結
かくしける時にハ大かたの待よしの事を経しつゝ待まそ
又初句にはたと又何事をゆるして人をさなうる思
よりうき故ハわしと思ひて俗歌の詞へ強く
身ハうかれんと思ひならせしとも更に違ひてあらさ
るうれへもなく山本しのひ一足踏りし本
しいふらめ又此歌のはつきまれ限也とあり
歌也たとひなくわれよわくまて余情ある意

摂政

何故と思ひもいれぬ夕たにまちいてし物を山のはの月

歌のとこゝ字ハかりまて忘るゝ頃待人をまつ夕
まて月をも待えしいかに人を必とまつへき夕ハまして待
ハ理也と秋とみ定てまして遺恨の余情ある詞

今日は一字二字まてもれをもれるほうりし歌五
百番歌合に
君ゆへハ待しもひたすら物のあはれにしられしとそなれけり（くる）
そともたゝしふ字まていひてさら歌也

鴨長明

たのめおく人もなからの山にたにさよふけぬれハ松風の声
人もなからとハ人もなき山とうけて人来ぬ意なからの山人
なからによしふけハ松風の吹くにも松風と結と云
字まなしてあり待山にしま風のふけハまし
てなかめよ夕ハまてまさる音信しぬ人
とうこれかく此らと云字し摂政の歌ハ歌と
同心也

式子内親王

君まつとねやへもいらぬまきの戸にいたくなふけそ山のはの月

此句の心はきこえ侍りされとこの句にかなふ所あり
といへる意なしつまなくから気色となく待かねて
といへるをまなふともかつは待かねてまたいふは
かくれを出し侍るとしもさとりけて月の出ぬ
まとろみもしまのりのよろこひおやとはうけくさま
なとにて侍るとらへてすむりてかへす
侍るなり

こゑやさん雨や雨んれはさのに玉井の梅（私云君ヲスハ国ヘモイラシ濃紫ワカモト借着ハラクトニ）記家
かくされ物やくれなゐもしんまんおかまへれ名月
名月のつきるまみし歌りりとこ宗祇方
なふく枝んきしそて芦よみをとも侍しせ
よの人のすゝめうまくらぬいるまと人と共
りてくるくとれ名月の川にあきもるとして

面白き月よとて出て行かうなとをとへしとれ
とさへさき物と云よ我は待かたしとて明行
月なほてもよりもわかれやと云ふをこめそ
よめり紫蛇言比動すりん

安信卿　如梅

とれつの秋風なしく萩のはなにおちかゝる花蕾おもて
河ぼに玉鹿みさはまとつらり河久しくと
せ紙はさりそれともり秋男と萩にて秋風
と人にてはきより言は秋風といふ名のわさら
方におかへとみするりそのとからけ蓋
しておもとい蓋つきれんそ又それとのん
しあり大くみ秋風なくそその蓋にすく
つめくるしく此秋風は萩をしゆ翔てゆく
ゐしとぬれてそのとくの秋しくおけしやまふ

なとよみ給へしわろしとこそ申也

左衛門督家通

はしくとは思ひすつるに身をつくしらぬ人なかり

待賢門院加賀か哥に　かねてより思ひし事そ

ふし柴のこるはかりなるなけきせんとは　といふ歌も

ありめとふいふんためしにつまとかしくよめるとそ

にしもありけり山田法師申すよ　志川のあやれ

おもしろくおもひつめつる故はれなとわりなき世や

ゆてしもこそといへんとありてし

殷富門院大輔

何かいはんふたゝひなきへしさのみやはよふ人命なりとも

世をすて花にはなれてみええり申也何かいふとは

命ある世思ふ人のつれなきはうれしけれはたえぬなるさ

身にかくらて命あるまいにそへとはうちこそ絶え

よと思ふにくやそて我なからむと思ふにあはれなりとも

とゝしきまゝにいとしまさ命めとそこそ申也

伊勢

何よりぬやさしすてゝ夕の五月雨につけてはつしかたと折りすへからむ

恨つらんやうな情なからん

と云ふをみてよみける歌時雨とやありそやと見ゆ

思ひの情やしる柳よとふめていかゝ申也五月の月と

つけてつきすといへる也文字を見て雨行思ひたる

人の明けゆきをしつきしれぬは思ひさゝかなし

後徳大寺左大臣

ふる人の月はなかめそのひかりおもと思ひつゝしらなからめ

人ゆくしこゝらてしも文字絶りのしく立つきこえ

まつ月よしなつくさむ河にわり文字をとかくまつむねのこゝ

されとなすめらきの秋月しくのひかりのやとこそう

なりゆくをうらみしも感情ありけんやさしく聞
ゆるゝ事也

八条院高倉

くもれかしなかむるからにかなしきは月におほゆる人の面影

月は見てもあはれなる折しも何となく人も恋しくゆか
しきれは月をみるゆへ今よりもやつれゆかんくもれかし
しかと人の面影月におほゆるとは月に心をとゝめぬとそのよし也
本哥　月見てはこぬ人またるゝさへうし雨と
かゝらんまりつゝとれん

通具卿

とらんと契りしことはたのみにておき出る有明の月

月みれはつれなきよりもつめありて恋とゐみしそ悔し
事は只夢のやうに思ひとけて成行と夜の月
とみてよその有明の月に似たる物なきかなしき事

月すまし契りし事の情しきまゝにありそゝそのまゝ
しなきをまたその有明の月まていまたに寸前の月まて
またやとてくるとこめてみるなる物なくに明の月と云
風情いつもて有ん事ゆゑに云也　本哥は
とらんと契りしにも有明の月を待出つる
事なりしといへる事を指しかやと云同也

摂政　後

思ひそよはなさかくるゝ月よさらぬたにかちそとさらにそゆかこそ

月みはと契りしなかめ入んとするあれ恨もなく感わりきと
し払ひ恋まとゐて契りて恋まれなといひ
恋はいつさかりよしやおもと人のうへに恋を仰しん
やうそ後のそめへ人の思ひ出するまれやしと云
云也風流ある事なり

藤原秀能

人ゝこれよのあはれ月いかならむそもそも見し心ときめくことこそ若

源氏物語乃蓬生の宮の心ばへめでたくありし人のとは

ねたうりなんは蓬葎のしげきありさまを月の下なる風

まずありけると獨寺ながめて見しそとしへらしいかにとも

あはれ人はそらしいかりしとてとさらにもなかれきる也

見る人の雨氣とある庵の雨よ独居りの秋の月

此句の文字切るなる也

梅波（渡り）

見ゝはよからほのかの空よかりさや〻ハ照りし山の月

此句ハとにかくそとなく云義也前ハ月ハそしてそ

とこそ照つらしよむかしく見ゆれてあはれいさや

まんちきしきりし雨と有月影とこそ照りつきと

こゝろよりも云也月の山の端よかゝることにそあるゝそ

独居という所ゝ思ひ切るなる也　見えゝたる

さらぬ人の中よむ海のことにのりなかれてさそくとらくたる

此き人は邂逅とまれそまれかと云詞也されはそ

かしこかりける事なり

後藤つせ

称ふのうしたる後と隔てならそまりもいてま（庵の）あことによ

五文字ぐ見ゆれしたる後（あまりとや）ところのしも今てそすこい

さきそそもはたる後そそるころ後をとてそるゝひとき

といふ事やとうれし月ハ庵の蓬生のさびしきことを

志らるゝしよろし人ハ月のあはれそるゝことと

ふる哉蓬生庵とひすそゝる云也文庵の蓬生へくし

わき申しかとも云人もあり

東瀧ゝ

思ひ出をたゞかねとのまゝら月ん何かの雲のあとの山の也

う拾をとハ蓬翁の句ゝ也此と照らしあすハ浪んかし

なく成るゝハ雲さまりしらぬに吹風ハらぬ
てゆしるく成るかに猶にそてらとやそれと思ひ出
たるかねことそしすしそうさハかねとハけるの雲ハ
ぬの山風ハとしやといひりぬるゝ人ハ秋をとしひくて
たらぬ作しらぬとそうみ（はるのけれぬの山風のことしと之り）さハ侍るまうる事そと
聞つめよしゝら物ハ宗也

宗甚　化師

うら見とひまてしと秋あるきこし思ひまれよし夕露（花）
根毛ひとく人成らしこと秋あるとすうしまてしと（ハ）
とハ今の強ましきと升かそて侍ませもさすゝ思ひ
なき夕暮ハ元とさそにうるあゝんまうましき（と）
思ひれすとひましたる事也いまれとらその萬成の
ことをいふ心也物ろう聞也流て宗甚の風也

指段　作

思ひれすめゝよひしましまし吹くにもさめ庭の松風
海よ物ろう事也松ハ恋よ縁ありて松と待ゐに也
てゝあゝろう事ありし此事ハらのいろさへさらぬハ
かさら〳〵いんやなのもとおくめと待ハたゞる
事そと思ひ〳〵てらめつさよ庭の雪風ハ音を
さけし秋をすさむ松遠そ吹さにやめとんする
松のとらハやしよりそり夢月さゝまりる

我子　湖叔

とハやさんハ秋の〳〵ろとの成せしハかるゝ也おきあらハ也
大つきねりハ萩の升さやく音としさつれやさうと
おもろまき風の扉よわさらとしんよりけゆり次第
あゝとくめて萩の香風の音となゝつゝ事と昔
よめるゝとやんのおりとんよりけさらし萩の音とハ
よ斗よ雲やもたくひすまんとしるさ判詞の

おほ空紀ちらぬのてやうことしるくうつしき也

摂政（後）

いつもきく物とや人のおもふらんこぬ夕くれの松風の聲

此うた松風ハ面白くしわれにしみて真

に成けりいとやしみてなくさむとこそ思ふらめ

こぬ夕くれハ君こんかよとおもつてゐるきさ地とゝき

くときすらしく法言松風入魂悩といつて

寂蓮法師

里ハあれぬむなしき床のあたりまで身ハならハしの松（秋）風ぞ吹

過逢坂とる涙も世乱と去こともよ大事ぞ

あらぬとかれハすまでハ床をとりわけりところあ

んとまあやうによにとをれてより弁捨て思ひゐる

くやうそわしくし待ましてくて甚なくて

床のあたりしみ面と同し松風の為をも添と

とふのとよみ本言ハ松風とやまの風とさる

りこさあつすつれとの風くそ有りろ

太上天皇

里ハあれぬ尾上の宮のおのつからまちこしよひも昔なりけり

人も尋ぬる時節もとしくあるまじくそぬそ

より後ハ人わすれはてたれはすこしあ人を恨みけく

いりすておのつからあれまさりけりとせしれハ此夕く

と結待ちとてもやまつめあらう夕ハ昔よ成らゆと

尾上の宮ハ宮をあらつのつあすまとひそんなふよ

此浦の秋のかやや又尾上の宮のなのつうとうら

羽乃えんにしありけらも高き風情ありけり

家隆

さそハれぬ林のゆくて山雲をかく風も峯にゆるん

秋の夕風山の嵐ふかれよるよふてうの雲

風の吹るひゞきとていうにすさまじ雲は何よりも嶺
しなく天地を分ちていふにいはれぬこゝろあるなりこゝを通し
又風にはさらにいひ侍りくるゝまで人〻まじく
此峯に雲なきを風の吹事ハ人の見月にしも見えしけれども
さつかれをもしらるゝうきさまよふ物はなきなりとなんけるから
よし心五文字切るゝなりといふ心

秀能

思ひいれふかき心のたよりまで見しはそれともなき山路
此哥定家卿も哥格なる由塵無之しとなり（深き心）
こと人にも思ひの深さよりかへつきぬるに山路
見るよ奥しなくかへつきぬる其しより思ひ入ぬる心
のことなくもむやとふふのてみるよ山にしゝそのあたり
より思ひ侍くそしるへかへきぬるといふこと也
よしとはけるなり――雲にあるすさ

定家卿

消わびぬうつろふ人の秋の色よ身をこがらしの杜の下露
秋とハあきの色あるといふことによりこがらしといふ身をこ
うこゝよりも心人の秋をしくうつる気色下枯の如くなる
に消やらぬ露の杜の梢の下に落て物思ふ身のとなる
消かねるとは人のうつりにし杖さまひ侍らんこと
さりぬる文字也

寂蓮法師

この人は秋のさびしさやさびしさのうしみなりけり槙生ひ秋
人の秋のさびしさに風情もあしし冷しき
と云ふ事となれんとうつり悲しく深くなりてよめり
けるく我思し涙よりうつり侍るとこゝろ人のおき
さりと秋にせずしてなりいかなるよしにあれ
くける

慈円〃

我云ハ庭の心ハよくなかめられて人をもおもひし秋の夕くれ

此五文字抄にあまたなんこりならんや秋ともま

よめて庭の村萩しほれ移りかはりてより露の

きえしもやはいろつくにもそめなしかへんとしおもひて

今ハよしく人をもうらみしあやなしうらしと

いへる我かくして秋の夕暮とらのすそてなりゆくこと云

源氏の巻て思ひ出の霊にわりなき一日案て

見せに我より云されし秋の暮のなを人にいひかへされは

ほそてなんかな也

家隆〃

云ても我おもひ御ハりけれはしたう夕くれとなりし秋風

そよまことれと契ちより今の御かりさん秋風のなら

御そうかみとい云これなくら秋風さして露と

云それを今秋風の立てより我袖よし露のをくと

云らんやくれなゐかり（わか袖乃露とハ涙のなみ之候之くれとハ）夕ハそてるまさりこそ白妙の暁

ハ契りときさらのつきとさらかなる哥也

俊成卿女

露ちらふ霞ハ秋の色ありまて見るそめ声よみらる面気

哥吟りとろよりすかく心きこえて面白く又いひ人々を

見てほとを詞ニハ出されたて哥述のなす也是くてき

事なる人ゝ秋の暮とさらりとも心得なれはよ国の

露をしいらひ体には といふそ思ひし暮のまして庭と

柏と露はまつさそらなうき見そめ哥文といふされ

し事ハさうとも哥文まう寸面気のこかりて霊

かくきんりや

慈鎮〃

んしそゆしまとおもはれこ瑞山松のこゑを歩れゆつくれの風

三帰を弄りとこなし也よりおのつ事ハ伊勢か歌よ
見ん人は山のゆ结ん白ひと君かわか人とあしとあししと（切とも）
ともおのつよりは事也此哥は来と云へれとそへは君
人の君か立とを乱しともかく花の云也より君かくん
松の楮は夕は鳥はとし何れを人て来く此沈と
るしととく人也

式子　内親王

いきてよもあすまて人はつらからし此夕くれをとはゝとへ
今は我事より命もあすまていつまてなき
ことしく命ほとに惜きと命を惜み思ひそらん
かゝれは哀也　おもひつき春は人はゝらへはしとさそ
ちるたはあまやるなんとすまれをは人はいとをせ
ていへつは我なる也詩よし如此旅舎はり一旅館
西人暮雨魂此人といへるし我事への（西出陽関無故人の人といふも我也）ふへるかさらい

なきよしおもしおかり

前大僧正慈円

暁のやうやしくなんと袖しおもしらくれはなとせとなき
あかつきの夢　袖の上をはしてさしてとわさ
ほしき恋てもりて思ふ　はかなきの暁をしけるつゝねむ
まちよく思ふなやて暁袖の夢を又たなつゝんなる
夢はいまありて袖の着れさやかにきこゆると也絶え
しして袖は見へし大事れすとそ

藤原　雅経

見る人はあり家とあよはらかさ袖にやとりける月かな
清見か関は浪のかゝるきなる也両けとこ浪はとは
らさらぬ関は人をとむるなるまして両家とあると
いり神し関りとらへつよきれちつまさ年の秋〈撰集〉
すよ山はかへ富士の袖は浪かかるやとれるとそ煙と沈

とふらぬ日そなき

家隆

思ひ入身はふかくさの秋の露たのめし末やこからしの風

深草とは思ふ心に深きといふ心なり深き（草也）下葉の露

もうけたりけるたのめし末とは人のたのみしことにて

そこは木枯のはけしくふきて露もかれけらしく

たのみもかひなき露のことくにはかなきと云ん之露のことくに（はかなき事也）

うかりける人を初瀬の山おろしよはけしかれとはいのらぬものを

慈円

我袖の露はなにとなれてやこれきたる袖より上の荻の上風

我袖の露は紅涙なるとし哀人は露とし見る純は秀を

見るわれし風よき露の心あるてしを縁よ心

荻の上風荻の上露荻の上に秀とき

こころは下よりつかへしく哀別なりしも

相模

多くの萩の葉を見てもかく人の心は秋にそこなひ

草花の中に萩は面白くやさしき花なりそのき

と秋ふかくなるまて見ておけともいろいろなり

深き人秋のあはれを知るやの身そ

見にくくしてとりくし思ふこともなりそれともろとしは

しく思ふあはれなる風情ありて人に語るへき事なり文

萩の初秋より色かはる萩のうら葉ふかくさへ

ぬしうつりさきに見すなりけるにいくんと云へき

古今　秋萩の下葉うつろふとりや独あれ

人のいねかてにすると思ひていふなり

一首の心はよめるなりしかし

よみ人しらす

しくしくのかの物思ふや萬葉なとも風なるてとも

烟と云へはたゝ風と我身またゝくていひそそより出る
われは人を思ふ物は世にしられわしきる思ふにまさし
なひかぬ烟にまさしいつ方よりいふ兄なひく事也
ましきと云也我行く思ふ物はなきなましきと云ハ我
思ひ切る方なきにてあらまほしき方也可行なさ
風にふくともふそよりいふにしても云ん也定家卿て
いふも世人あまねくのハ火さくもとも煙ならから風も
此人我よりなり方也

後朝て

（ある）うらみても両氣ハさてわすれて恋をさらめあんおもりそ恋
よそにまさしもは恨かこる事ともまたゝくいふ
花やうつくしさよりかハ君さらしもとハ我
よはらくちしむふ情は憶まつもさと
手力ん給也舘も今みる両氣とも打乱て恨る

ここさなし何の両氣と言ていふ節也み
れし文字（の）言るしるし付たるにけ字也
よみひとしらす
とりあはせとすきや白妙もころもそれ作はへき
いつよりと物をすく候ましく人のみとかいうやせ
おもふつなく言ていとゝ秘のこひ也或歌に
我とらひとたる人のゆけん白妙の秘のまきの言ける
まれてハところやき那須野て云る沙子に衣の浮草
れはさこそすそとすまやぬらされしやひとよあり
思ひすゝやとも又為章て云よまりとのんとすん
ふみ思にくとまやあまり久しきとある
とすれは五音通しるなし

日

白妙てさらさらつゝもらすれとしれみるもかりともかりよ

ころすゆゑところすといへる也白波に立さりてくとも
と云海人の也袖の白波とあり くもありしとぞいへり
ところとく人となのりん人といふみるめと人をとゞめ
みるめとぞのめる袖の鶯ぞもあるも袖さし波のよくらめ
とよめり 又人をみるめに逢ひぬるとも思ひ
うらすまにみするさかれにちかへし人にあかぬ世の
とよめり 又けふまでは見つゝみつきりなるを
これらのはにも立し稿とも也とよめり

月

ゆてゆくかさいみるのはてこそくるあまのはらみ
さして行とといふ思ひけるかすむ漆は皆の
字なれ也それと漆の字にかひけるも思ひけ
よくさしは皆曲とるく思ひとるも也流るこ
といへるなれくさきしくわけるさ御こころ

来ゆつとはさす思ひすてゝさてゆきとつくるかく
れなり也 伊勢物語 に
ひうとゆきそはとめる御なよみすくわきれいさ
沖すなれ也 古今大 さは額ぬし漆ぬきて
世間につらしみるめすゝる皆の字漆の字を
とけて縁によりつ題也

雅経　藤原有家

山けやさらで小庭に流とる春そきにける雪のしき
五文字雪のかくつもつてあとといへんなあしく深
と云也とふ事は雪も春に一天四海の中をさひ
詠もみとぞしと庭の雪のひきていくれとひる
これもし我心も思ひとてのし人や歌れぬると

四季に随ふ人の心はとかはれし春のきさらぎよ此
ころなり と又いはれしさりんと云茂叡慮風流なり
さら云ふ也さくしてハとハいるすてハと云ふ河辺の後書
物すよいつもせんさくして云ふこゝにすくなくゆゑたれ
月を愛で花をもとよりかハそれそれにしてところの
又さてしおもしき秋のゆふべなどよりかハさるゝそれを
こゝろもかやうに云ひしよりてかはりかはりゆゑと大概
いつ日し桜のよしそうくわらハつくさよの

花山院御歌

見る人として咲くをつゆまで梅をつれすゐ世よとも（てらるみる）
人の花をところに見るそこしむるゆかしつゝひらる
ともすこ人ハそのからはのとよして常ならぬ世と
観念をこくさまと思ひにつくくく咲散らる桜
花をけふらんしてもし常ならぬ也あれそとわれて

さまうしちんかはりなきこと一天の月の下人のみ此
花のちるもかく世のうきをゆめくゝく月
日に送りうつさましくうそしきよむ

菅贈太政大臣

みよへのからきみ柳たれわつれしとも思ひわすれ
五文字ハ左遷のゝち梅柳とハいさゝかなるしるそ
にして菅公ハそのゝちのへのことく我と
まよへるしてけわれさはにつけて都を恋つゝよもと
おもひ出わすれかなさへとかくの梅柳をめら
てなすとくりこそらいかなるよしを大宰府にあそとして
かくてみなけらむいつまでつきの花の

宮内卿

春風はふくみゆさまよ花のけやりいろとしわれとも
きてよ花いわつぬまり年しまれゆうちに衰さら

深きと花ハわかれぬや思ふらんと也されハ花と云ふま
さく人とそまつりてより先祖乃高官よ侍りし中よ
し累代まて乃師範よ立らんことを見れ
とも（？）やうく中将云まて老くそめる事と不便と
覚ゆめるよ歌さらぬそ也深まる心也

藤原雅經

なれくてみつる花み（？）けきをもなと告らりの花も下陰
家庭の桜ハ鞠のかゝりまて久しくなれて（松）
こゝまてしかりて風にたゆたふ花の雪にふ
其こともかくてとも事とそのほとよあらしうらむ心也
し時見ゆるてこはしれぬまされうくれ
み春まてさらるれよけりかると思ひ出るを
けり世羽さそみならされとも白河の花の
縁よりのけり春毎よ世白河の花と見人ほよ

我身の老おとろへゆく事と花よ對して歌つゝ
よ我よりさきよ花のちりせぬ事よなれてこそ
春と花ハかはらとこそ思ひつゝめ我ハちりてゆく
るゝ花よ對して老齢のかさなりゆくと歌ふ
するのをおもひ侍りてといひならひ舊慣ありて有心よ侍り
なと白川のとハるゝと云ふしきりしれともふる趣也

慈円

業の身よ向ひん花ハさともかくハ法まゐるめてたからぬ（の道や）
世よまさしき時花の名もまよめそしことさ人今（あり）ハ
うしとや一首よまれとてそめまて花と春とを
知侍ると常住ふ滅十二因縁さる心裏（観）空と
思ハられとさらん也花と云ふよ世るゝハこのあたりさとわ
はかまとハ梅を思ひまそてより浮也季道都下ごよ
書ハさて花の色ひしさしもわくハかまき（あらく）

さしわかく思ひ出なき此桜ゆへあらぬ心よとはいひし今し
ふとよめる皆同じ心の世の果て見てしまつりかせさし
しめしさは御てとは何しも花とそ思はる今と
そう弥よ世の人の老は今は惟喬親王
夢とこそ何かせん世とこそ思ひきりきん須は恨さ
とわぞいひしさと見えつまで

加賀左近

おぼつかな霞たちこめけふ此松の陰りつ春の夜の
春の夜の月はいとゞ勝るかな松の陰とりけり月いかが朧
りけんさぞ奥にも奥とそつて面白くしおかれは
しわぐんと思ひやりつゝ武隈の松は二木を
都人いかがと問はばみきと答へん　武隈面白さに
下と又雅言すよ　武隈の松にこの若きえぞ
あとせ御へくや邦にきれつるとぞあり

小弁

ちらさずとかねての花へとあるへからぬ風の花
の月かりおへまりけるよいと白くちらすの
花のさかりなるとされは花の花そとへよとは物れ
とやさるさされいと集の詞共也さへめつるはきさ
とくちらすも花すもいひさへめそとよめる弁ときさ
すさとめへよおやしみのそこよ白くさけるは何
は花さうとちらすは花し白き花と本にお見也
面白也又ちらすし花又哀めすやされことちさ
へとちらすしにて
散らすれそ世の雪や我身へよあん思ふすさしいかで
藤原盛方朝臣
山深く思ひいりし世中はいとどかくてしすみぬ月
月日の出るより入るまでの程とながめられよりは待す

しらてハまさらりし人の昔ニ示ハ月の出入ヲあから
しれわさらりしも昔也よつけて山林の栖とんと
めんすかそうれと思ひさとそ又思ひの人「
山すてしうさハれりとてしらてしとい之今
言　世の中にとそしらてしるめく
とそしらてしとこ同ハこしてし而しすれと云御
御感ゝ
いふて俄にさしのやうとりしんそる月ハつくさに
（私此家ニ思ひニモ八雲ニ聴スメ歎化下ニ有シ時ノ歌ニ長秋集ニ見エタリ）
そあるとん大化えひ御集中けるをさしたゝうり　あとと
我も裏の九宜のまうさしもさしらと若
乃袖よとみゆそとて傍うよ月の氣のやとらと
てくほ侘しみれまてしわいれよ見の光え「
みりれかくこおゝつ寸やとこゝや月ゝ雪ゝ
とそ月くとして見しと人へ人そまくうあらとし

隠またよみる也袖て芝のやうとハ御のん也
増基法師
こゝろからいひならなりし也ハさに月のいてよこゝろ
ろうとそいふ此句筋あさう一方り未の哀の言
思ひつけて哀ふつるまそなりぬれとさうかの侘の哀と
いなけれとも芝てとゝめきり侘の涙よ月のやとら
らんとそて逢まよみあさうと云へて袖よ月の出ける
まとそ哀哉しとおさま出来よまくてさんまりうすた
並同
有明の月のいるをとなかめてそ野寺のかねハきくへかりける
明かたこさ秋のよも寺の鐘よ到りまてなかめいて
うきにしさハ限しらきとまきと思ひ侘かなりよ撞
はすみとゆうて哀てよ已前の人とさいと言ふ先
やあそしそいりまとうまつさくし朝槿（権）若落ハ

野僧家ニ在ク深禁半夜鐘とあり是ハ和漢
れうきうりしなくうきもとこそ世の中ハ人ハ野寺ニ
訪僧帰ニ帯月ヲへりくるとも同つきゐらぬかり
とこ羽もしともしと世の中ハおりなるまゝしこさすもなりと
云心也後撰　花のこなたへてはなれて山寺の
かへれぬ庭ニこゝろへりゐるとよふりみへりなり
というし世の中ハ也へりゐるとハいつし同て春雨
深くらへくらもてすいる深夜月はもとになへて
聞すとらむとも月まおしゆりて出家ゝらむと
みゆり

月もなく空のけしき雲吹て清て山くれどとり嵐
夜の殿は嵐とぞなりし月もそひにし夜の秋の
はやとけし風の音さへつきり山かくれとよ小篠　**秀能**

たとのうと打さやきて山かよる嵐の峰ては激り
眼前の趣也絶妙人の作る時のなう覚え也太
山の嶺見あしそしまで也あり

西行

月の色に心をきよくそめましや都を出ぬ我身なりせば
月はそてわれもこゝろも面白とも思ふべからず
世はいまださなかりしハ月をも心にもあはれとも
道心をおこしてわれたりそのまゝやどもせぬ
しとりなる家を出家する　曉風と共に出し
ありしてもいつこ山のくれの花にこもりつゝ見しまゝ
やうたとひ

月

なけかりけ世のハけと思ふ心にも月の
我の又うくよろ鈴の音ひゝけりき

すみけるは齢のかけゝ西けて月と出つゝあり
出も先までは老もせやうに花や色も移りてま西
まかうてけりは老もくすをく如何りて我身の
よしめ此と思ふうちにちやと月の出くるに近く
成りをおしらりあひてろくに月の出は月をみる
ことを思ひて我齢の傾きぬるをしらせたり月を
みてしりつゝといへる也西行法師と本歌
出ぬるよへめる月くおしむるおしさよ

二条院讃岐

あれぬるは月やあはとなりにけりしくしくも袖の露かな
先濱約いふりるまき云也あれおとろへ行くまゝに
月はもれてわかれしかつて昔の月も
るゝ時みし月の光はいかり行やかへと思ふらむ
見ゆまゝにのきりて月はさやうに和して昔の月を

いへしはさてとみてもつらくあれにしとおもひ
てとらゆゑ也反西對まその云ひつとおもひてまて

法橋行遍

あはれなるくさの月くもりはし昔もまりにやあらん
月おもさ寺に遠くてみえて行くらもまで云ひてはよ
んうしみさまはいつりれ本よとる絶されは
もろく何雨露よ入しわはあるりてや
るゝひぬりしまりてそのまゝとりし変るとら
ゆそくりてあらまつりけり集の云歌也
まゝすゝ昔のまとかくりあしゆりしま露は
川とはあれしと月の西気のくもりさりしいや
しかりつとと云也おや文は以んとれとは昔
とあるにはさのみもあまきれて更に西さとも
和はさてゆりとこんせ名んとこはらんと云

何よくらはりものわろくてさしも出そす
思ひ出もなくみさとあまゐてあると何も申風情かはぬるらん

平忠盛

あかさあん苔の人は部さて宿りかはす有明の月
あるさいは集の字におもりくわつまりくるすゑ遍照
寺若侍人々対は月よ花のと人とといひけりや
ゆくよ深て人を部とを寸月みをとりけると
いへりあからさまの事なすまて世にいはれける気色
かとてこれ弱とみてかその時人と覚まてとるよ
すくらぬもしふ足ともわつるゝ事也付てはそ
思ひとの心ざしよあらしけるくさしや

經盛て

あきとよりの秋の庭にそわかれもれまして きゝのん露の夕
秋は侘くらひかりし庭さへ面影あはれよみ紀

侘しよ侮りて深わしらり庭のありさ海人
をも山部をもみて侘してありわり付さへめ沈没我
あらんなどの思ひのちまつ一念わかれなし此くも
あはれ侘り恋を侮の巻よたいらんちるこゝさを
下へしりくへしとこえぬをましてわきゆく人とも紀と
かてよろうあらむ同物語ともうとも絶ひひおかされ
て似合さんかとまとも世話すましして清らん
まとてつきさ侘る事物もなりけるて風情のあるさ
こゝすめ

左清つ猪**通光**つ

あさぢふや袖にくちにし秋の霜わすれぬ夢をふく（吹）あらしかな
五文字茅屋の心也誠に懐旧也袖にくちにし
といへるよみかたと感けり世々のわかれを観
思ひもまして只袖の涙と成て夢もさめゆくとそ

往事渺茫
都似夢旧
交零落
半帰泉

もと秋の露と云此句とし とくり露ハ千草より来
りてほろ〳〵なりけれハ心あるまじき事ともいふ風
とハ浮世の事のみ也風ハ事とさまよひけれハ
萬代さへかなんと云ものよ吹嵐なるとよみける歳
芽生とわきまえてめくりけるさハ風のやどりとふりはよ
して明暮也ゆく〳〵ハ風くるりせ帯寄
ともなくともさし山里の漁者生ハ心みすまし志くるりと捨也
さいぬるハ漁弄生のかくるもあると云ニ字也又風の
郭乃月夜ハ事をさそうなれハ萬事ニ寄
されとも我ハうき世事とする事いかにあはれ
めくりあへる嵐ハとこそ斯くより字也我よハ浮世
の事ハさめてん嵐もよしかりつれと嵐より
向て一ひとり寄せ宴風懐旧ハ大事の部也
かく聞えて よわりさ心思とかしく御事

ものつゝまぬ風と云説よし嵐とも山の嵐と
ハ頭より風としにけるや

後翁也

くずの葉のうらみかほなる萬の世と忘れぬかさの命を
葛ハ秋のうらみとなりて葛の葉のうらをふくとして
人のうらミ世をうらむるかなしさ葛のうら
ミつゝ枯そこそまつ寸只萬の情ありつれよは
りすく咸くる秋の袖をとみつよわれ萬の世とさみしと
云かゝる秋風の情と迎へてよみけり宣なるかな

梅改　後

人生為の形の雲色の枝にかれてハ跡ハ只我色
かくの雲ハ芒てりとよ山道也只とと云字金言
妙句也此圏わきて満吹風ハ四季とまよ只秋風
ありと譲りて秋風の本意ハかくあらしく

ありまじきわざなれども是にて此儀の人おそろしきこと読之
顔ハ閑寂枯淡也極のさしといふ物の風也極をもて
底とおもへることを云也　極のさしとは何とて全
は何事にもおとせぬ方ハよく〳〵あしきと
且る也　他の私の風体極底ハ此極をとりてかき
ふうとよむ也　別に極極底もこれなるか
（私云良基ハ後普光園摂政将軍ハ普広院殿也）
将軍細に能き別ものにきまる也　一条良基（普光院殿也　義教）将
軍家にも此道の何ゆへにかくそれ〳〵此人〳〵に云ける
ありしにゆへありおりめづけて義教公も同じ
都へかへりて、やがて風雅の何くそれ〳〵を云也
見えず　此に諸歌の風雅のよろしくと云て
ふうとぞ見えて此浦人にもなりゆきし
ありしは大事に遠く　しるしとなき
件などを見るより此浦次の貴賤にあはれと

ときそのかゝりて上意諸家にわかりかりしかされ先
此風体にて当座の此人をもありて此流に
かきくへて見せくりけする極底と何事もそれを経当
とよむ也殊てはう出来もなるに此の見たるところ
けりとる人こそ何ありたぬ作らなくしる極やさの
風体なり

宜秋門院丹後

山さと世のうきよりも住わびぬことのほかなる峯のあらしに
わりなきことのおもしろきをうきといひて山ふかく
住りよ大かた人は山へこそかくるゝにさき事も
ありかねくて山里にたくみて人もしこと
わかる家の嵐に携てすくそ山住をあれども
心は嵐にとみさしよりうき世を離るゝ事も
ありし也　寂莫なる山里にさる世より住の時

山さとよわうしさ海るる歌人さりけりやらんすまさりやを

人丸

もゝぬ氏八十氏川のわりさよいさよふ波のゆくへしらず付

氏は八十氏ありと八十うぢとつゝけける也此川

国まみまゝ来る古何ぞ網代と云ことうきあれと

わうさみまゝ宇治の網代木まよ波のすらうみ同下を

ふ浪の寄り来とゞまりて居候らんをきれにと

又拾ふらす也いさよふといふそいやと云也

言よりそふらりける

家持卿

天河よふ河はまとしらん鵲の橋は七夕ちらしに

深まま来て天河に渡りて牽牛織女の宿を

見はするよ羽あり鵲の橋は鵲の羽をならべて

するゝとみえし此歌より羽の橋とぞ

鵲の羽をならべ此羽ふよ深く渡せる鵲

鵲の橋といへり宮中によみなされて鵲

西行法師

山さよ深き世ふらん故とう歌しくるし昔かへりん

此参議篁王小野に隠岐へ流されし比篁参議の

ほとふるをさまて書りて云へそは遠流とを

あるかなしきや宮ふるを見て遠流らんと云

をとし何とされんを云そもひとえ人頃を悔

とあそりて都へきされし事とりて悔しく

ゐう書く人とりて

天智天皇御哥

紀今や来丸秋よまそれたる名のりとして紀は

此哥作者よくりしくみせ候いまにまる庵を

よ及ふ可古の哥はゐしよいやまますもてありおまのうた

そゑ之
銀のめぬきの太刀とさけしはてあふしれ歌をねかふは浅かるを
みちのくの黒き駒をむすてあさかる歌をねかふは浅きを

周防内侍

わすらるゝみをそみゆかき長柄川　てらのれし　名のみなからへよ
伊勢の哥よ　長柄川をしのれて　ねよすこ潮はせよ
名のみのみてしすけれ　此哥ハ郭忠の心なり
長柄川をしのてほけるよ依りて　岩ようさ
つけなるや　道信　緑捨　えつくにけつさを
見そよあつし　序す此ためし哥なりと

慈圓

山里に契しいほやあれぬらん　またれんとたに思はさりしを
山里にとりて文庵とよみたるは世をのかれ
待たらしと又紀て　却と心得て　庵をまちて

とらひさらんや心を寄りて住へしと契つれし
はうぬいまされんすとわしつそゆくんとなり
まそのまゝとりて住人しくるよえてすゝんと思ひ
し庵やあれぬらんと也　此庵の主とおもへるんといふ心
てあきらう庵をまちかきてるへんと思ふれは庵を
慕うとくらはれいりぬらんと云也　僧霊徹詩云
相逢盡道休官去　林下何曽見一人
まされはそ相みえぬの哥とそわかりてわつらふはきりんと侍ん
へ相みぬ事あらはす　合のいかたせとの二字ある事
かとしのいとゝしきての思と詠ひ　観念もろ
所にて相み事を表ししてさへいふ事としてたり
あそしてへ今はわしんつまのことくきこえんとなしと
云なりや　有心体の哥也　五文字　斎頼之

いつれの日と定めからにあらねとも　わきてやさしく今宵の

[illegible]

おもしろきことは月にかくるれぬるものを思ひそへて

おもしろきとは月のこと今月は是いさやかなるをかしき

侘ひしき[illegible]の袖にやとる月は影を[illegible]

てみしけしきも月しかりそらにつくしなされける

袖にはこれ月やとりきぬると也袖と恨てとれ

いみ秋の[illegible]姿ゆくく[illegible]の[illegible]信實

[illegible]よりちかき袖にやとりきて恨まもる月の影

とあり月ししるし[illegible]

わすれ[illegible]山[illegible]たのもしき

西行法師

月のゆく山に心をおくり入てやみなる跡の身をいかにせむ

月影[illegible]とさそふおのかな[illegible]のよそにやかてかくるる[illegible]

ふる月はそらにてすむ心のあはれやまぬと人

ことよせしめと西行法師の徑しぬるまて見えけり

和泉式部

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかにてらせ山の端の月

此いさめしいを削んしより[illegible]の感なりし

[illegible]人しとのたまちらねのいさめとしそしきに

[illegible]つくしるあからすそらく

[illegible]とるけさそら[illegible]

といまてさかさらぬせぬと観念して[illegible]

[illegible]

[illegible]人の[illegible]おもふ[illegible]

文約[illegible]

しきいまつよつるに[illegible]

さくらぬなるやれいさめぬ[illegible]の[illegible]

源師光

あしくていけるといへれるましうちまほれ侍るをよそよ（おもひ）
りうしとは人をいさめたるまて也取捨云よ
上わ行てなきかなとつてと他のよろしきところ
うきまみるへくさうを人のよ見えいへれと（つまる）
かはしまうあみたとく言葉あるかよといへり
人のよとありていへれるかは侍しまことに天つと
さつうもろへ

右臣常縁勝也

右一冊東野州抄出也云以てまことかくし
あしかは集作者あと葉うきこれ下書
加し書写後さらにまつへきよわかすとて
巻遅きし取捨ふしふて加見えぬ深一筆
者也

言旨判

大隅国宮内八幡宮社僧當時有鴻臚卿　與之幕下
此注養遷不持し而於陳列山科卿し
普請場一瞬し次写し
文禄五年六月上旬　也足子素然判

異本云
此集之抄漏脱之事以予抄出之東叢被追
加之令分別之抜書者一冊也此抄出者被抄出
歟見分之可有疑殆明日可令披見て
為之抄写耳可隠密者也

慶長二年霜月六日　也足子判

右之抄弄秘本無相違者也一読之次加奥書耳

慶長九年七月廿五日　幽斎
玄旨判

九州大學圖書印

九十七